日本における性的少数者のパレードの意義とその展望

——参加者側と運営側へのインタビューから見る東京レインボープライド——

巴　健太郎

一　本論文の概要
(一)　問題意識と目的
(二)　先行研究の整理
二　日米における性的少数者の運動の歴史
(一)　米国における性的少数者の運動の歴史
(二)　日本における性的少数者の運動の歴史
三　東京レインボープライドの概要
(一)　フェスタ
(二)　パレード
(三)　ウィーク
四　参加者の視点
(一)　インタビューについて
(二)　「非当事者のため」のイベント
(三)　「当事者のため」のイベント
(四)　「お祭り」であると同時に「運動」でもあるイベント
(五)　特定のセクシュアリティが中心になっているイベント
(六)　イベントの中で感じる「多様性」や「連帯感」
五　運営側の視点
(一)　社会に変化を与えるための非当事者へのアプローチ
(二)　イベントにとって重要な「当事者性」
(三)　運動とお祭りのバランス
(四)　「資本主義」や「企業」などとの関係性からみるイベント
(五)　「選択しない」という選択
六　イベント・団体としての東京レインボープライドの展望
(一)　イベントの性質とそこから生じる意義
(二)　イベントの性質により参加者が感じる問題とその解決策
(三)　運営側の展望とイベントの性質により生じる限界
(四)　団体としての東京レインボープライドの展望
おわりに

一　本論文の概要

㈠　問題意識と目的

性的少数者に注目が集まる中で、報道などでしばしば使われる言葉として「ＬＧＢＴ」というものがある。これは［Ｌ：レズビアン］［Ｇ：ゲイ］［Ｂ：バイセクシュアル］［Ｔ：トランスジェンダー］という言葉の総称であるが、日本では基本的にメディアなどでは主に「ＬＧＢＴ」という言葉が性的少数者をまとめて説明する言葉として用いられている。[1] そのため本論文でもインタビューの中では性的少数者全般を指す言葉としてこの「ＬＧＢＴ」という言葉が使われることもあるが、本文中ではより多様な性と生のあり方を示す言葉である「性的少数者」という言葉を主に使用していく。

しかし、ＬＧＢＴという言葉が存在していたとしても、それぞれの性的少数者たちが交流する場というのは非常に少なく、自助グループやＮＰＯ、企業内のダイバーシティ推進を進める団体のミーティングなどがこうした人々が横断的に出会う場となることが多い。これはＬＧＢＴという言葉はもともと性的少数者が団結するための政治性を持った言葉であることから、そうした人々が横断的に集合するのはそのマイノリティとしての問題に向き合う空間であるというのはある意味必然であるとも言える。

たしかにＬＧＢＴという言葉があることにより、それまであまり交流のなかった性的少数者が垣根を越えてつながり、ともに運動や支援を行うようになる。しかしその運動や支援の現場において、構成員が現場において生きづらさを感じていないかどうかに気をつけなければならない。これは一部のセクシュアリティや複数のマイノリティ性を持

つ人に集中しがちな事態でもある。これらの人々の生きづらさは先述したような運動や社会の変動の中で、時として「ＬＧＢＴ」という連帯の中で見過ごされてしまう。[2] 支援や運動の現場において生きづらさが生じてしまうとしたら、本来生きづらさを軽減させるためのものであるはずの運動や支援が逆方向に作用してしまうということであり、非常に大きな問題である。

こうした問題意識を元に、本論文ではまず運動や支援の中でも特に日本最大のＬＧＢＴ関連イベントである、ＮＰＯ法人東京レインボープライドが運営する一連のイベントである「東京レインボープライド」について、これまでの運動の歴史的な背景やその立ち位置について理解した上で、参加者と運営側両方へのインタビューを通じてイベントの効果や参加者側と運営側における認識のズレ、イベントに関わる人々の中での意識の差について分析を行う。分析により後述するような様々な「意図」や「目的」を持つ東京レインボープライドにおいて、性的少数者などにたいして日々の「生きづらさ」を軽減しているのかだけではなく、逆にそのイベントに対する「ついていけなさ」ゆえにさらなる「生きづらさ」を生じさせているのではないかという両面を明らかにしていった上で、東京レインボープライドが現在生じさせてしまっているイベントへのついていけなさを軽減させるためにどのような手段が取り得るのかを考察する。そしてイベントに対する参加者からの期待を通じ、団体としての東京レインボープライドが今後どのような展望や可能性を持っているのかについて分析を行う。

なお、筆者は東京レインボープライドの二〇一四年度のイベントに当日ボランティアとして参加し、二〇一五年度・二〇一六年度のイベントには運営委員として団体に参画している。筆者は運営委員として主に協賛企業や団体に対する営業活動とイベント当日に向けた備品発注などの会場関係の業務を行った。

本研究の意義は、以下の四点となる。一つ目はＮＰＯ法人東京レインボープライドが企画・関与している一連のイベントについて研究することで、性的少数者に関する研究ではこれまであまりなかったパレードに関する研究を提供

することである。これまで性的少数者が行ってきた様々な運動や活動について社会学に基づく研究はなされてきたものの、後述する二つの研究を除き、日本におけるパレードに関する研究はこれまでほぼなかった。このイベントは現在日本で最も大きい性的少数者関連イベントであり、毎年様々なメディアに取り上げられている。こうした代表性をも持ちうるようなイベントの持つ特殊性をも含めて研究を行うことに本研究の最も大きな意義がある。

二つ目に世界各地で行われている「プライドパレード」の一つとして東京で行われているプライドパレードに関する研究を行うことで、今後の日本における性的少数者研究に対して比較を行う材料を提供しうる点が挙げられる。近隣諸国の韓国や台湾などでもパレードは開催されており、それぞれの国で文化に基づいた異なる特徴を持つ。そういった意味でも各国の性的少数者を取り巻く環境や現状を理解するにあたり、歴史的系譜を共有するイベント同士を国際比較するための基礎データを本論文は提供する。

三点目に、多様な性的少数者が集う場として日本最大のイベントである東京レインボープライドにおいて参加者がどのような印象や感情を抱いているのかを調査し公開することで、性的少数者のコミュニティについての理解が深まることにある。これまでも主に特定のセクシュアリティやジェンダーアイデンティティに限った形での研究はされてきた。しかし本研究では様々な性的少数者が横断的に関わる東京レインボープライドのイベントを題材として、性的少数者が日々感じている「生きづらさ」を解消・軽減するためであるはずの支援や運動自体が「生きづらさ」や「ついていけなさ」を生じさせてしまうプロセスやその原因について探る。

最後にイベントに対する参加者の期待と、そこから見えてくる運営団体への展望や現状での課題について見ることで、東京レインボープライドという団体やイベントの持つ独自性を明らかにするとともに、他のマイノリティに関するイベントや団体に関する学問に対して、東京レインボープライドの独自性ゆえに考えられる展望や可能性から一つのあり方を提示することができる。

本研究の「問い」を簡潔にまとめるとすれば「現在行っているイベントとしての東京レインボープライドにおいてどのような意義と課題があり、その課題はどのように解決し得るのか、また団体としての東京レインボープライドはどのような可能性や展望を持っているのか」ということになる。[3]

(二) 先行研究の整理

本節ではこれまでの性的少数者に関する研究、特にこれまで日本のプライドパレードを扱った論文を概観し、現在日本最大のパレードを行っている団体である東京レインボープライドに関する研究である本研究との関係を整理する。

日本でこれまでプライドパレードを主たる題材として扱ってきた主な研究のうち、本論文の問題意識や目的に近いのは砂川秀樹と堀川修平によるものである（砂川二〇〇三）（堀川二〇一六）。ここでは日本のプライドパレードについて横断的な分析を行った堀川の論文についてより詳しく見ていく。

堀川修平は二〇一六年の論文において、一九八〇年代前後から見られる性的少数者の運動としての「パレード」の変遷に注目し、その今日的課題について論じている（堀川二〇一六：六四―八五）。堀川はまず、南定四郎が性的少数者の権利獲得という目標に向けた「パレード」という形態で運動を始めるために力を注ぐようになった経緯を紹介する。その上で、運動の政治性や認識の不一致などが原因でイベントの規模が縮小し、南自身が運動の第一線を退くことになるまでの経緯を記述している。

つづいて堀川は一九九六年以降沈静化していた日本の性的少数者のパレードを復活させようとした人物として、先述した砂川秀樹をあげ、彼が戦略的に南のパレードとは異なる「ミッション型」の運動を目指していたことを指摘している。堀川による砂川へのインタビューによれば、砂川は南の運動は学習会でも重視されていたような性的指向・性別自認に基づいて参加をする「アイデンティティ型」であるとしている。こうしたアイデンティティのもとに集ま

ることは仲間意識を同時に形成していくことでもある一方で、この性的指向や性別自認などのカテゴリーのみで相手を判断してしまうことに繋がることを堀川は指摘している。その上で堀川は砂川が「ミッション型」の運動はこうした分裂を防ぐため、また何より性的少数者の「数の少なさ」という問題を乗り越えるためにも、非当事者ながらも性的少数者の問題への賛同者である「アライ」にも参加を促進できることに意義があると判断したとしている。また堀川は砂川が行ったこれまでのパレードへのネガティブな認識を払拭するため、楽しさを重視したパレードを「祭り」のようなパレードとし、その戦略は全国各地の性的少数者のパレードへと引き継がれていることを指摘している。またこうした運動には楽しさを提供するとともに「性的少数者がいる」のだと示している点に大きな意味を持つと堀川は指摘した上で、これを示すために多くの人々を動員する運動手法が今日の運動の形態の主流となっているとしている。

最後に堀川は「運動の今日的課題」として、今日の新自由主義的社会において性的少数者が「ＬＧＢＴ市場」という言葉に代表されるような市場価値に基づく基準で判断されることに無自覚無批判であることは、マイノリティ内部での格差や差別の助長につながることを指摘している。

二　日米における性的少数者の運動の歴史

本章は本研究が対象とする性的少数者の現状について日本とアメリカにおける性的少数者の運動の歴史を確認し、性的少数者の運動の一環として行われている「パレード」とはどういうものなのか、またそれが日本においてはどのような歴史を持つのかを考察し、次章以降の分析に必要な基礎知識を提供するものである。

後述する通り、今回主たる対象として扱う「東京レインボープライド」のメインイベントの一つである「パレー

ド」は、もともとアメリカの性的少数者の運動の一つである「プライドパレード」が元になっており、そういった面を鑑みた上で、本章では日本とアメリカ両国における第二次世界大戦後から両国で「パレードが始まるまで」の歴史を概観していきたい。

また、共同代表理事の一人である杉山文野もインタビューで言及しているが、アメリカにおけるパレードは性的少数者の中でもレズビアンやゲイが中心となっている（第五章参照）。それゆえ、本論文では日本とアメリカの性的少数者の運動の歴史の中でもレズビアンとゲイに注目した歴史を抜粋し紹介していく。

なお、本章の記述は第一節全体と第二節の第二項までは主に風間孝と河口和也による研究と飯野を参照しており（風間二〇一〇）（飯野二〇〇八）、続く第三項は堀川修平による研究を主に参照している（堀川二〇一六）。

㈠　米国における性的少数者の運動の歴史

1　ホモファイル運動と「レズビアンとゲイの運動」

アメリカにおけるレズビアンとゲイの運動が組織され始めたのは第二次世界大戦以降であり、この運動は「ホモファイル運動」と呼ばれている。この運動はその後の運動と比較した際に、社会規範に対して同化主義的であり、穏健性を持ち、適応主義的であったと批判されることが多い。この運動の担い手であった一九五一年に作られた「マタシン協会」や、レズビアンによって一九五五年に設立された団体である「ビリティスの娘たち」の活動では社会的な敵意を減少させるためにはあえて性的なことを強調しないというアプローチを採用した。ホモファイル運動がこうしたアプローチを採用した背景として、ホモファイル運動が登場した一九五〇年代にはまだ、レズビアンとゲイを「倒錯者・精神病者・逸脱者」とみなすマスターナラティブが主流であったためである。

その後アメリカにおいてアルフレッド・キンゼイらによる性行動の研究が行われ、調査において一八〇〇〇人のイ

ンタビュー調査を基に、アメリカの白人男性のうち四％が生涯を通じてもっぱら同性愛者であるという結果を公にした。また女性においても三％が生涯を通じて同性愛者であるとした。この研究は同性愛行為が逸脱行動であるという常識を覆すという意味において非常に画期的であった。

2　同性愛解放運動

こうした流れの中で、同性愛者の歴史を大きく変えた出来事であった「ストーンウォールの暴動」をきっかけとして登場したのが「ゲイ解放運動」である。「ストーンウォールの暴動」とは一九六九年六月二七日の深夜にニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジの酒場である「ストーンウォール・イン」において、酒類販売権のない店の取締りという名目で警察の手入れが行われたことに対して多数のゲイやレズビアン、トランスジェンダーらが三日間にわたり酒場に立てこもり抵抗した事件のことである。この暴動を大きなきっかけとし、六〇年代の新左翼運動や解放主義者の理論の影響を受けて登場したのが、ゲイ解放運動である。同化主義的であったホモファイル運動に対し、ゲイ解放運動が掲げたのはすべての人にとっての性の解放であり、解放主義者の影響を受けたことで、社会全体の持つマスターナラティブへの同調ではなく、それに対するカウンターナラティブの生成に重点が置かれるようになった。そしてそれに伴い重要視されたのがカミングアウトという実践であった。

一九六〇年代末に誕生した同性愛解放運動はゲイだけではなく、レズビアンによっても担われており、ゲイが同性愛に対する社会の偏見に焦点を当てる一方、女性の同性愛者の中には自分たちが差別される原因を女性差別に求めるものもいた。こうした立場の人の中には自らをレズビアン・フェミニストと呼ぶものもいた。レズビアン・フェミニストは女性解放運動と共に行動することを志向したが、異性愛者のフェミニストからは歓迎されたわけではなく、アメリカ最大の女性組織であった全米女性機構のレズビアンに対する当時の反応はしばしば否定的であった。

㈡　日本における性的少数者の運動の歴史

日本における性的少数者（特に同性愛者）にとって戦後は、それまで西洋の学問に由来する形で精神的な病理の一種として同性愛行為が「変態性欲」として定義され、それを異常視する見方が徐々に大衆へと広まっていった時期でもあった。こうした捉え方にたいして日本で意義が申し立てられるようになったのは一九七〇年前後のことであり、この動きにはゲイとレズビアン両方による二つの潮流があった。本節ではまずゲイとレズビアンの戦後の運動について、両者が協働することになるいわゆるエイズ予防法（正式名称：後天性免疫不全症候群の予防に関する法律）に関連する動きについて概観する。

1　エイズ問題までのゲイ・レズビアンの運動

ゲイの運動として戦後まず行われたのが、学生運動の影響を受けた男性同性愛者である東郷健による選挙への出馬である。彼は一九七一年に同性愛者であることを明らかにした上で、参議院議員選挙に全国区から立候補した。彼の最初の選挙運動は二万票を獲得したものの、落選によって幕を閉じる。しかしその後も東郷は同性愛者としてその存在の可視化へ向けた取り組みを衆参両院や都知事選挙への一〇回以上の立候補を通じて行った。一九七〇年代の末にはラジオ番組にアーティストの大塚隆史が出演、ゲイであることを公言している。

こうした状況が変化するのはエイズが日本で騒がれるようになった一九八〇年代半ばのことである。男性同性愛者の間でのＨＩＶ感染の広がりをきっかけに、男性同性愛者へのサポートや政治的な取り組みを行う団体が誕生していくようになる。東京では一九八四年にＩＧＡ（国際ゲイ連盟、のちにＩＬＧＡ（国際レズビアン／ゲイ連盟）に改称）の勧誘を受けた南定四郎によって設立された「ＩＬＧＡ日本」と、一九八六年に結成された「動くゲイとレズビアンの会（団体の用いる呼称から、以下アカーと表記）」という二つの団体が設立された。両団体は不安と恐怖をもたらしていたエ

イズをめぐる問題に取り組み、東京以外にも札幌や名古屋、関西でエイズや人権擁護の活動が進んでいった。

いっぽう女性同性愛者は、情報を得るためのメディアや出会いの場を持つことが男性同性愛者以上に困難であり、男性同性愛者が経済的自由や移動の自由を比較的持っていたのに対し、当時の男女間におけるジェンダー差も影響し、女性同性愛者の多くがそうした自由を手にするのが困難であった。そのような中で、日本初の女性同性愛者の親睦会である「若草の会」が一九七一年に作られた。この時期にはレズビアンも様々な異議申し立ての声を上げ始めていた。一九七〇年代の学生運動を含む新左翼運動の中にも性差別が根深く存在していたことに失望した女性たちがウーマン・リブ運動を始め、女性は男性に従うべきとする性規範に挑戦した。女性の性を肯定せんとしたウーマン・リブの主張は、レズビアンたちに自らを肯定する可能性を提供した。しかしながら先述したアメリカの状況同様、日本でもウーマン・リブ運動のなかでレズビアンを性的倒錯として認識する人も少なくなく、彼女たちの問題に必ずしも十分な関心が払われたわけではなかった。

2　「エイズ・パニック」とレズビアンとゲイの合流

ＨＩＶの問題がアメリカにおいて出現したのは一九八〇年代はじめであったが、日本でエイズの「第一号患者」が確認されたのは一九八五年三月二二日であった。当時、この件について報道したメディアの一つである朝日新聞では、アメリカ在住の日本人男性がエイズであると判明したとした上で、暗にその男性が男性同性愛者であることが示唆された。しかしこの報道の二日前に、同じ朝日新聞は「日本にも真正エイズ」という見出しで血友病患者のエイズ死亡事例について書いている。にもかかわらず厚生省は「アメリカ在住の日本人男性同性愛者」を「エイズ第一号患者」と発表した。

この「第一号患者」が確認された後、一九八六年十一月には日本の風俗店で働いていたフィリピン人女性の中にＨＩＶ感染者が発見され、一九八七年一月には「神戸事件」と呼ばれる、厚生省による日本で最初の日本人女性のエイ

ズ患者を確認したとの発表が行われた。これによりこれまで「男性同性愛者」や「外国人性産業従事者」のような特殊な状況とは無縁であるとされていた人々に対しても危険が迫っているという不安が煽られ、パニックが起こった。

こうしたＨＩＶとエイズ関連の動きの中で、これまで見てきたようにゲイである自分を自覚するとともに、集団的なアイデンティティが生じ、この気づきから政治化が始まっていった。飯野はこの予防法案とそれに対する反対運動がゲイにとっての政治化を促す契機となっただけではなく、レズビアンとゲイとが共闘するための課題を初めて提供した出来事であったという点でも重要な契機であったとしている（飯野二〇〇八：一四四―一四五）。

当時レズビアンもこの運動に関わっていたことはあまり知られておらず、その理由として飯野は当時の多くのレズビアンにとって緊急性に乏しい問題であったことを挙げている（飯野二〇〇六）。当時はまだこれらがレズビアンの間においても「ゲイの病気」という誤解が広く浸透しており、関係ない問題として考える当事者も多かったのである。それでも飯野によれば、一九八八年の五月に発行されたミニコミ誌『れ組通信』において初めてＨＩＶとエイズの問題が取り上げられ、ここで予防法案に対する正式な反対表明が行われた。飯野は『れ組通信』がこの反対表明を行ったのは『れ組通信』において記された通り、アカーの「熱意」によるものであり、レズビアンの団体がエイズ予防法案への反対運動に参加するに至った背景には、アカーというゲイ男性を中心とした団体の働きかけがあったことに注目している（飯野二〇〇八：一五二―一五三）。アカーはその結成当初からＨＩＶとエイズに関する情報の提供に積極的に取り組み、ミニコミ誌の発行と並行して勉強会を開催するなど、法案に反対する人々やグループ間のつながりを形成する場としても機能していた。

ここまで見てきたように、レズビアンとゲイの運動は必ずしも交差するものではなかったが、エイズ予防法案に対する反対運動という点において初めて協働するようになった。こうした協働が日本初のパレードの実現や、その後今日まで続くＬＧＢＴに代表される性的少数者の運動の先駆けになったと考えられる。

3　日本初のパレードへ

今日まで続く日本における性的少数者のパレードは一九九四年の「第一回レズビアン・ゲイパレード」にその起源をもち、その日本初のパレードは先述した南定四郎と彼による運動組織である「ＩＧＡ日本」であった。南はＩＧＡ日本を作る前に一九六〇年代の安保闘争に参加しており、そこで「声なき声の会」の鶴見俊輔と出会い、参加者と議論を重ねつつ運動の方向性を決定していくという鶴見の手法を身につけたという。その上で南は同性愛や同性愛者について、特にそれらが社会において抑圧される背景を学ぶことにより社会を変革する戦略を立てることができると考えていたために「学び」を重視していた。

南は一九七二年に自ら株式会社砦出版を創立、そこでゲイマガジンである「ＡＤＯＮ」を出版する。この雑誌を見た当時のＩＧＡスウェーデンのセクレタリーであったビル・シュアーからの依頼により、南は「ＩＧＡ日本」を一九八四年に設立する。南は当初、この運動を学生運動や安保闘争のように捉えており、当時シュアーから提案されていた「一軒の家を借り」、「日常的なコミュニケーションの場を作る」といった形態の運動をイメージできなかったとしている（南一九九六：一七三）。同性愛者が運動することは困難と考えていた南だが、シュアーの助言により抗議運動以外の形の運動の可能性を見出し、ＩＧＡ／ＩＧＬＡ日本の設立を決断した。こうした運動観の変化をともないつつ、先述した雑誌「ＡＤＯＮ」とＩＧＡ／ＩＧＬＡ日本を中心に南の運動は展開されていく。

ＩＧＡ／ＩＧＬＡ日本が主催した学習会の趣旨は、社会変革のためにまず自分が何者かを知ることであった。特に参加者がゲイ中心であったために、ゲイとは何であるのかを参加者一人一人が知ることも含まれていた（堀川二〇一六：六七）。また南は歴史や社会背景についてだけではなく、一九八〇年代に発見され、当時は「ゲイのガン」と呼ばれていたＨＩＶとエイズについても学ぶ必要があると考えていた。こうして一九八四年から始まった学習会に参加した者たちの中からはのちに「府中青年の家事件」[4]に深く関わる団体であるアカーが分離独立し、彼らもまたそれぞれ

に運動を興していった。

こうした学習会の活動それ自体やその参加者の運動が活発になった一九八〇年代の後半、南は性的少数者の権利獲得という目標に向け、大規模な「パレード」という形態の運動のために力を注ぐことになる。南は先述した「エイズ・パニック」期にあたる一九九一年頃にも「エイズのパレード」を計画したものの頓挫した経験をしており、一九九四年のパレードの際もその経験を活かせば実現できるだろうと考えていた（堀川二〇一六：七〇）。こうして南は社会変革のための抗議活動と学習という行為に重点を置きつつ、パレード開催へ向けて準備を行い、一九九四年の「レズビアン・ゲイパレード」を実現させた。当初五〇人で練り歩き始めた行列は、到着地点ではその数倍にあたる三〇〇名ほどにまで膨れ上がっていた。こうした動きに社会変革の可能性とそれが当事者に受け入れられる可能性を感じた南はその後、一九九六年まで東京でパレードを毎年開催していった。

三　東京レインボープライドの概要

本章では本研究の主な分析対象となっている東京レインボープライドのイベントの概要と経緯について見ていく。まず「プライド」という言葉は、ＬＧＢＴの人々が自己の性的指向や性自認に誇りをもつべきだという概念を表すものとして、またＬＧＢＴのパレードそれ自体を指す言葉としても流通しており、そうしたパレードは世界各都市で開催されている。

そもそもこうしたパレードが始まる契機となったのが先述した「ストーンウォールの反乱」である、これはその後の性的少数者の権利獲得運動の大きな転換点となった。そしてその一年後の一九七〇年六月に五〇〇〇人以上の男女がセントラルパークに向けてデモ行進を行ったのが初めてのゲイプライドパレードであるとされている。そしてスト

ーンウォールの反乱があった六月は今でも「Pride month」とされ、世界各国にてプライドパレードが行われている。

前章で述べたように、日本では「東京レズビアン・ゲイパレード」という名前で一九九四年八月に初めてのパレードが行われた。その後二二年間で三度にわたり主催団体の変化に応じて名前を変えつつ、今なお続いている。

現在のパレードは「東京レインボープライド」により、二〇一二年度からこれまで通算五回行われている。二〇一五年度にこの団体はＮＰＯ法人化し、それまで共同代表であった山縣真矢と杉山文野が共同代表理事に就任した。

東京レインボープライドの行うイベントは、代々木公園で二日間行われる「フェスタ」、フェスタの二日目に道路を封鎖して行われる「パレード」[5]、主催・共催イベントのほか、多種多様な支援団体によるイベント情報を集積する「ウィーク」の三つに分けられる。

㈠　フェスタ

フェスタでは代々木公園イベント広場にて二日間にわたり、当事者団体や企業、大使館や飲食店などがブースを出展し、ステージ上では当事者によるパフォーマンスや著名人の演奏、政治家や各国大使等のスピーチが行われる。直近の開催である二〇一六年度のパレードでは会場・沿道含めて六万六千人の来場者があった。

ブース出展者は性的少数者以外のマイノリティに関する運動を行う団体も含めたマイノリティ系の団体のほか、主に外資系を中心とした企業など、イベントの趣旨に賛同した数多くの企業・団体が出展を行っている。

フェスタへのブース出展に関しては趣旨に賛同し、遵守事項を守った上でなら協賛として申し込みを行えばどのような団体でも出展が行える。

また、同時に代々木公園の野外ステージにて行われるステージでは、二日間にわたってパフォーマンスやスピーチが行われている。ステージ出演者に関しては毎年一般からも公募するほか、パレードの日には一般的にも名が知られ

ている芸能人を招いて演奏などを行っている。[6] そのほかにも各国大使やそれに準ずる人々のほか、政治家や著名人らによるスピーチが行われている。

(二) パレード

イベントの二日目には、道路を封鎖した上で様々な団体が飾り付けたフロート（山車）が[7]人々を先導して歩く「パレード」が行われている。パレードは二〇一五年度までは代々木公園の渋谷側出口から坂を下り、左折したのちにJR線の高架をくぐり、明治通り沿いに東急プラザまで行ったところで左折、原宿駅の表参道口や国立代々木競技場のそばを通りつつイベント広場まで戻ってくるルートを通っていたが、二〇一六年度は渋谷スクランブル交差点まで南下したのち左折、JR線の高架をくぐって宮益坂下の交差点でまた左折して明治通りに行くルートへと変更された。このルートをパレードが通るのは日本で行われた初めてのパレードである一九九四年の「東京レズビアン・ゲイパレード」以来のことであり、渋谷の中でもより多くの人の目に触れる場所であるスクランブル交差点をパレードが通過するという意味においても非常に重要なことであった。

パレードに参加するには、代々木公園イベント広場のフェスタのパレード受付にて参加したいフロートの窓口に並び、パレード登録カードを受け取る必要がある。受付終了後はフロート毎に異なる集合場所に所定の時刻に集合する。カードの交付において名前や年齢、セクシュアリティなどを問うことはなく、また参加料は発生しない。このパレードは警察との交渉の上、デモ行進という名目で道路を封鎖して行うため、各フロート・マーチングには参加人数の上限が決まっており、それを超過した人数での行進を防ぐためにこのような措置が取られている。

㈢　ウィーク

フェスタ・パレードの前後のゴールデンウィーク[8]には、日本全国の性的少数者の当事者とアライ[9]によるイベントが数多く行われる。ウィークでは、様々な団体によるイベント情報を集積し、それを東京レインボープライドのウェブページやＳＮＳなどで告知に協力をすることで各イベントにより多くの人を集めることが主な活動となっている。これはもともと二〇一一年に任意団体として発足した「東京レインボープライド」とは別に、二〇一三年から任意団体として発足した「東京レインボーウィーク」が始めたものである。両者は別の組織であったが、二〇一四年度には協働し、二〇一五年度には運営組織が統合された。

登録されるイベントは年々増加しており、発足時の二〇一三年度は全二三イベントであったのに対し、二〇一四年度は五四イベント、二〇一五年度は六〇イベント、直近の開催である二〇一六年度には六一イベントが開催された。イベントは首都圏が中心ではあるが、イベントへの登録において開催する地域の条件は設定されていない。

四　参加者の視点

本章では実際に東京レインボープライドのイベントを経験したことのある人へのインタビューを通じ、参加者がこのイベントをどのようなものとして捉え、不満や問題意識を持っているのかを分析する。なお、本文中に引用するインタビュー協力者の語りは、プライバシーの保護や読み易さのために意味を変えない範囲で修正を行っている。また、補足が必要な点については〔　〕で補足を入れている。

表1：本論文におけるインタビュー協力者とその属性一覧

名前	セクシュアリティ（自己申告に基づく）	年齢	職業	参加回数と形態
A	ゲイ	20代前半	学生	2015：ボ・2016：参
B	パンセクシュアル[10]	30代前半	会社員	2014：ボ・2015：運
C	ゲイ	20代前半	会社員	2016：参
D	ストレート	20代前半	学生	2016：参
E	ストレート	40代前半	病院事務	2015：ボ・2016：ボ
F	セクシュアル・フルイディティ[11]	20代後半	学生	2012：参・2016：参[12]
G	バイセクシュアル・アセクシュアル	30代前半	会社員	2013：ボ・2014：運・2016：ボ
H	ストレート	20代前半	学生	2016：参
I	アセクシュアル[13]	20代前半	学生	2015：参・2016：参

※「参加回数と形態」における「ボ」とは主にイベント当日の作業を行うボランティアスタッフとしての参加を、「運」とは運営委員としてイベントの企画運営への参画を、「参」とは一般参加者としてのイベント参加を示すものである。

㈠ インタビューについて

今回の論文でのインタビュー協力者は機縁法に基づき選定し、半構造化インタビューの形式で適宜話を掘り下げながらインタビューを行った。詳細は以下の通りである。

㈡ 「非当事者のため」のイベント

インタビュー協力者の語りには、東京レインボープライドのイベントが性的少数者に関するイベントでは最も規模が大きく、メディアからの注目も同様であることから、イベントの持つ性的少数者を代表する性格に関する言及や、それを反映した非当事者からの目線に対する言及などがあった。

1　露出・ドラァグや「新宿二丁目」に対する違和感

こうした視点を読み解くにあたりインタビューの中であがったエピソードとして、フェスタやパレードにおける「露出[14]・ドラァグ」の存在を挙げることができる。

Aさんはこうした人たちについて「こっちの俺でも『うっ』と思った。一般の人にも異質な感じがするのではないか。」としている。こうした人々にAさんが抱く「ついていけなさ」の感覚には、他の当事者への差異化と多数派への同一化という側面がある。この発言の中ではAさんは性的少数者の当事者でありながら、「一般の人」と自分とを同一化し、「露出・ドラァグ」の人々との差異化を図っているのである。

これについてはCさんも同様に、自分は好きになる対象が異なるだけであるという認識をもとに、イベントでの「露出」や「仮装[15]」が過度に差異を強調するものであるとして否定的な感情を以下のようにあらわにしている。

> 男の子が女の子を好きになるように、女の子が男の子を好きになるように、何も変わらないじゃん、自分が好きになった人がたまたま男だっただけじゃん、なのに「自分は男だ、ゲイだから・レズだから・私はトランスジェンダーだから、こうなんだ」っていうのは個人的にはあまりいい印象じゃない。だから仮装とかは正直ちょっとああいう場ではなって思う。（中略）ああいう場所で見る仮装とか露出がひどいやつとかはちょっとその度に「うっ」ってなってしまう。それはその人を否定しているんじゃなくて、あなたのしているその格好があなたたち、自分たち全体のイメージになるってなんでわからないのって思う。

上記の発言ではAさんのインタビューでも出てきた「『うっ』となってしまう」感情が起きてくる理由として、フェスタ・パレードにおいて「みんな（＝非当事者）」による「自分たち（＝性的少数者）」に対するイメージ付けが行わ

れてしまう可能性が提示されている。

こうした露出・ドラァグの人たちに対する感想として、非当事者であるDさんも以下のような感想を述べている。

飲食のブースでCAMPY〔注：ドラァグクィーンら女装ウェイトレスによる接客を行うバー〕の人たちが出店しているところがあって。そこの客引きというか声かけを聞いた時にそこだけね、一瞬身がのけぞったっていうのがあって、なんか引いちゃったのね、そこで、ぐわーって迫ってくるものがあって。

またこれに近いインタビュー内容として、同じく非当事者であるEさんが、自分のような非当事者が来られない理由として「新宿二丁目」という言葉を用いながら説明している以下のような例を挙げることができる。

まあ新宿二丁目の、新宿二丁目をなんどもいうのも気がひけるんだけれど、歌舞伎町的な雰囲気が、あの、出ちゃうと、あ、当事者のための集まりなんだなっていう、やっぱりイメージが、印象が強くなっちゃうからだとは思うんだよね。で、ええっと、特に男性とかだと、そういうのを見に行くよとかってなると、で、当事者じゃないとすると、やっぱりちょっと他の人からあいつそうなのかなって私みたいに思われたりとかするのが嫌で、なかなか参加ができない人もいるかなって思うんだけれども。

これらの発言は、本項でのCさんの発言にあったような、差異を強調しすぎるがゆえに非当事者に対して受け入れにくさを生じさせてしまうのではないかという懸念を例証したものと言える。

2 「非当事者が当事者のことを知る」ためのイベント

これまで前項でみてきた発言は、このイベントがもつ代表性のゆえに、非当事者にたいして誤った認識をもたせてしまう可能性を懸念するものであった。これはこのイベントが当事者のみならず、非当事者の参加も想定されているイベントであるがゆえに、換言すれば「非当事者に性的少数者について知ってもらう」イベントであると参加者によって捉えられているがゆえに、生じる懸念であるとも言える。

Aさんは、イベントのもつ目的の一つとして「認めてもらう」と言うことがあり、その目的において露出やドラァグクィーンの存在が問題になる可能性を示唆している。

> 露出・ドラァグとかもあるし、その人たちがステージで踊っているのを見て「うっ」って思われるんじゃないかなと思った。存在をアピールすればいいのか、認めて欲しいのか、前者ならいいけど後者なら必ずしも望ましいわけじゃないよね。

また、Cさんもパレードが持つ役割として「個人的にはパレードをしたっていうのはある程度外部への発信だと思っていて。（中略）そこまで強い意図でなかったとしてもどこかしらで、その普通の人っていうのもちょっと語弊があるけど、世間に発信したいと思っていると思うんだよね。」と述べた上で、「同じである」ことを発信することの重要性を以下のように強調している。

> もし自分が外に「わかってほしい・理解されたい」って思って発信するとしたら、僕は君たちと何も変わりませんよってことをアピールするから。でもパレードって個人的にはなんていうの、露骨な格好をするじゃん。こっ

ちの人の露骨な格好をすることがこちらの人全体の、特にパレードとかはスクランブルまで歩いて戻ってきたのであれば、世の中の印象そのものをそれで決定付けてしまう、と個人的には思っている。（中略）個人的にはなんかそういうパレードこそ普通の格好で歩くことに意味があるんじゃないかなとは思っています。

そしてCさんは、イベントに来てくれる非当事者を受け止める仕組みが現在のイベントにないことについて「会場にもし仮に来てくれるノーマルな人がいたとしたら、それは振り出しには乗ってくれているんだよ。（中略）なのにあの会場にはそれを理解してくれる、しよう、させようとする場がないじゃん」と批判している。

こうした非当事者の目線や知ってもらうという目的を重視している意見は他にもあり、Eさんはイベントがどういったためのものか聞かれた際に「基本的にはこう、交流する場だと思っていて、当事者と当事者ではない人たちが。こういろんなことを知る場かなと思うんだけれど」と述べた上で、ボランティアを二年間続けてきた非当事者として、イベントにたいして感じる課題について「私には理解できない世界だわって思われてしまうとやっぱり近づけないし、そうじゃないと理解もなかなか社会の中で進まないと思うから、意識を、非当事者の人たちの意識を変えるには、やっぱり当事者の方も意識してアプローチするのが必要かなって」と述べている。

一方、非当事者でイベントに参加したDさんは、自分のような存在が想定されていないことでイベントにおいて寄る辺なさを感じたことについて以下のように述べている。

特に今自分たちがこういう活動していますっていうことを紹介している人たちって、俺がストレートだと思っていないわけ。むしろなにかしらLGBTの中の何かにひっかかるんだっていう体で話しかけてくる団体なんかがあったから、ああ名乗りにくいなっていうのがあって、言いづらいなって。

ここまで本節ではインタビューからイベントを「非当事者のためのイベント」としてとらえる見方について見てきた。これらのインタビューから見えたものとして、参加者たちがイベントの持つ代表性を認識した上で、その代表性ゆえに非当事者に対する啓蒙や啓発を期待していることがわかった。そうした中で第一項において指摘されているように、イベントの中でのドラァグクィーンなどの存在が差異を強調しすぎるがゆえに非当事者に対して受け入れにくさを生じさせてしまう可能性が提示され、非当事者からも非当事者の存在が想定されていないのではないかという指摘が見られた。

㈢ 「当事者のため」のイベント

本節では前節とは逆に、参加者がイベントを「当事者」を重視していると感じた点や、当事者にとってイベントがどのようなものであるのか、またはあるべきなのかといった点について、インタビューを元に分析を行う。

1 当事者が「自分らしく」あれる日

まずCさんは、普段の生活やこれまでの人生において「あんまりこっちの人と会ったりしない人」、特にその中でも自分の性的少数者としてのアイデンティティに問題を抱えている人にこそ、「なんだ変じゃないじゃん。自分はこの人たちと何も変わらないじゃん。こんなにいるじゃん。ってなって勇気付けられる人がいるかもしれない。」というような自己肯定感を生み出す可能性があると指摘している。

またEさんの以下のインタビューからは、参加者にとってイベント中は自分のセクシュアリティが当たり前であることが大きな包摂要因となっていることが見て取れる。

パレードの当日に、テントを組み立てる時とか、机とか運んでいる時に、参加していた女の子が急に「普段の生

活がこういう雰囲気だったらいいのに」って言ったんだよね、それがものすごい衝撃的で、そこの空間の中では彼女たちは自由にというか、不安とかも感じなくて過ごせているのに、あのいわゆる普通の日常ではそれができていないんだなあというショックを改めて感じて、まあやっぱりそうなんだなっていうのを認識した。

しかしその一方でCさんは「同窓会」という言葉を使いながら、イベントの中にはすでにコミュニティが出来上がっており、いきなり参加するにはハードルが高いということを以下のように指摘している。

あの場所にいた人たちの多くの人は個人の印象だけど、友達に会いに行っている感じ。「久しぶりー」「やっほー、元気してたー?」みたいな。（中略）集団じゃないけれど、もう出来ているなーって感じだった。それがあの場所に行ったところで「同窓会」みたいなもんでさ。何も新しいものも始まらないし生み出さない。（中略）マイノリティ同士で会いに来ているのにさ、その場所でさみしいって思ったら辛くない?

また、Fさんのインタビューにおいてイベントに対する「同窓会」という呼称について聞いてみると、Fさんはその呼称に対し「それはみんな言う」と肯定しつつも、その「同窓会」というあり方の含む問題点について「当事者団体のことを誰も知らない人とかは一体どれ見ればいいのかわからないと思う」と指摘している。

ここまで本項では、性的少数者の当事者にとってイベントが持つ意義とそうしたイベントの持つ排除の可能性についてインタビューを元に分析を行ってきた。人々にとって普段とは異なる環境であるイベントにおいて自らのセクシュアリティに悩むことなくいられるという点は大きな包摂要因となっている一方で、本項ではさらにイベントが性的少数者の中でも内部のつながりを持っている人により適合した空間である可能性についても見てきた。CさんやFさ

んが「同窓会」という言葉を用いて説明していたように、イベントには性的少数者が他の性的少数者との繋がりを持たないがゆえに入り込むことができないという困難が存在している。こうした困難は本項で引用したDさんのインタビューにもあるように性的少数者同士の交流の場として期待されているイベントだからこそ、Cさんのインタビューでも述べられていたようにその期待が叶わない場合の失望や辛さをより大きなものにしてしまう可能性がある。

2 「当事者のためのイベント」という側面の欠落

本項では、前項で挙げたような「非当事者のためのイベント」という側面に対して、何よりまず「当事者のためのイベント」としての側面が欠落しているのではないかという指摘と、それを完遂することが必要であるという意見を見ていきたい。まずGさんは自身がボランティアとして関わったのは、イベントに「居場所」のようなものを提供する側面があったからこそであるが、現在その側面がおろそかになっているのではないかと指摘している。

そもそも私がボランティアをし始めたきっかけっていうのが、さっき言った通りで、もっと当事者がそのままでいていい場所を作る、そういう日を作るっていうことだったのに、一般の人はもちろん理解してもらうっていう点では十分必要なことだと思うけれど、やっぱりクローゼットの人が多い中で、なんかもう少し当事者性があってもいいのかなって。

また、Gさんに当事者性があるイベントとはどういうものかと聞いてみたところ、以下のような返答が返ってきた。この返答の中ではGさんはイベントに期待している役割である「当事者の居場所」という側面が「他者への発信」などによっておろそかにされてしまっているのではないかと指摘している。

私すごく思うのは、パレードの変化している点として、三年前とかは本当に当事者の人たちに来てもらって、その日は自分らしくやろう、みたいな。でもやっぱり今渋谷区とか世田谷区がああいう風にパートナー登録とか始まって、そうすると、性的なマイノリティっていうのがいるんです、認めてください、っていうなんか、他者への発信の目的にすごく変わってきちゃって、イベント自体が。

また、ＩさんもＧさん同様に、まずは当事者のための場所であるべきだという点について以下のように話している。

まずは当事者ベース。当事者じゃない人に何か伝えようとしても上手くいかないと思う。今の所。結局今年で何が伝わったでしょうか。一生懸命何かを伝えようと考えているから、それがうまくいかなくてイベントが成立しない。まずは内側に目を向けて、内側で楽しくやっていけば寄ってくる人もいるから。そっから徐々に広げていく。

ここまで本節では当事者にとってのイベントの意義について見てきたが、その中でいくつかのインタビューから、まず当事者が他の当事者につながることができたり、イベント会場における性や生のあり方が多様なことそれ自体が自己肯定につながることができたりと言った意義が明らかになった。その一方で当事者どうしの繋がりがすでに出来上がってしまっており、むしろ繋がりを求めてきたものの、もともと他の当事者との繋がりを持っていなかった人にとって、イベントがむしろ辛さを与えてしまう可能性や、前節で見てきたような「非当事者のためのイベント」としての側面が優先されてしまっており「当事者のためのイベント」としての面がおろそかに見えてしまうなどの批判的な意見も見られた。

㈣　「お祭り」であると同時に「運動」でもあるイベント

インタビューでは、東京レインボープライドのイベントに対し、いわゆる社会に対する「運動」として捉えている意見と、「お祭り」として捉えている意見に分かれた。

このイベントがお祭りであるのか運動であるのかという点について、Cさんはパレードがあるがゆえに運動としてイベントを捉える見方を「ただ個人的にはパレードをしたっていうのはある程度外部への発信だと思っていて。そこまで強い意図でなかったとしてもどこかしらで世間に発信したいと思っていると思うんだよね」というように示している。

一方で、パレードがデモ行進として申請、実施していることを踏まえた上でもパレードを「お祭り」であると捉える意見も見られた。Dさんは初参加ではあるものの、パレードとフェスタ両方に参加しており、両イベントをお祭りであると定義している。

> 出会いをして行ってなにかしらそのつながりを継続させていくときの一つの機会なのかなって。あれやっぱり定期的に開催されているっていうことの意味はすごく大きいと思うわけ。客観的に見た場合にね。で、定期的でかつ大体この時期に開かれるっていうのがわかっているイベントっていうものの意味ってすごくやっぱり大きくって。

上の語りから読み取れるように、Dさんはまずフェスタについて主張を含むものであるというより人々が集まることに意味があるとした上で、「定期的に」「決まった時期に」開かれていることに非常に大きな意味があるとしている。

Dさんにパレードの感想として「あれはデモとして申請しているがデモであると感じたか?」と聞いたところ、以下のような返答が得られた。

> デモだとは思わなかったね。なんか、なんていうか、周りも一緒に柵隔ててだけど盛り上がった感じはあるから、やっぱりあれはどちらかというとお祭りであって、かつ、もう一つやっぱりお祭りっぽいなと思うのは定期的でかつ周期性があるからじゃないの、おそらく。それも込みかなっていう気がする。

このように、Dさんはイベントの持つ定期的な面や周期性、周囲を取り込みながら一緒に盛り上がっていった様子から、パレードをお祭りであると規定している。

一方Eさんはイベントの目的について、「大きいイベントだし、団体としては一番大きいよね、おそらくね、なんで、当事者じゃない人たちに向けてもうちょっと大きく発信できるんじゃないかなーって」と運動的な側面への期待を表明している。

こうした側面についてはGさんも、「当事者のためのイベント」という側面から権利獲得のための主張に変わりつつあるように感じたことについて「前はありのままであることを祝おうみたいな意味合いがすごい強かったけれど、今はなんか同性婚だったりとか、パートナー登録そのものを認めてくださいみたいな政治的なメッセージだったりとか、社会に向けたメッセージだったりとか〔が多くなった〕」と述べている。

一方、これまで何度かイベントに参加しているFさんにイベントの目的や意義を聞いた際の回答として「目的はないんだと思っていて、私は。あれはお祭りであって一年に一回集まれて、非日常的な場所で同胞が集まれますよっていう場でしかないと思う。あれ目的遂行性の高い場所ではないと思う」とイベントの目的遂行性の低さなどからお祭

りと規定する様子が見られた。

ここまで何人かの語りを引用しつつ、いかにイベントが「運動」だけではなく「お祭り」としても捉えられてきたかを見てきた、本来その出自であるストーンウォールの暴動から続く系譜として政治的な営みであったパレードが、近年日本の文脈においてはデモというよりも「お祭り」という認識で周囲に見られているのである。その際に参加者たちから出てきたのが「目的志向性のなさ」や「周期性」や「自然に集まってくるもの」といった印象であり、そうしたものが結果として「セクシュアリティのお祭り」というパレード像を生み出していることがわかった。

その上でFさんは、このイベントが「市場価値的」なものによる「ネオリベ的な」価値観と接近することで、これまでの運動の文脈だけではなく、新たな文脈をもってLGBTという言葉が使われるようになり、それにより自身も含めた当事者が参加しやすくなったと述べている。

> アイデンティティに基づいた抵抗運動だっていう文脈は今でも保持されているとは思うわけ、ただもう一方でLGBTっていう言葉が非常に市場価値的な言葉、ネオリベ的な言葉に巻き込まれたことによって、多分それによって、逆に多様性みたいなものが、あってもいいやみたいなことになっている。（中略）操作的概念としてのLGBTっていうものが出てきた感じ？　操作的概念としてのLGBTってものがある意味非常に運動色とか当事者色をうすめたことによって、逆に今まで乗ってこられなかった周縁化されていた当事者が乗れるようになったって感じ。

イベントが運動としての様相を呈さないことにより、自分自身のセクシュアリティについて「結局わたしの人生にとっても別に女の子が好きだってことはそんなに大きな意味合いを持っていないから」と語るFさんにとっては、む

しろ参加しやすくなったのである。

こうした目的志向性の薄さを肯定的に捉えた別の例として、以下のHさんの語りを上げることができる。Hさんは同じように目的志向性のないイベントとして「コミックマーケット（コミケ）」を例に挙げつつ、東京レインボープライドのフェスタを「お祭り」と表現してその面白さについて述べている。

すごいあの場全体から、大きな目的性とか「何のためにやっています」っていうものは多分特定し得ないんだけれど、特定し得ないからこそ、個々から発せられている「私はこれでやっている」「私はこれでやっている」「私はこれでやっている」っていうのが集まっているから面白いっていう、コミケみたいな面白さっていうようなことはあるかもしれないと思う。

Fさんも同様にコミケに例えた上で、イベントに参加しやすくなったことについて以下のように述べている。

コミケにさ、そんなにアニメとか漫画とかそんな詳しくないし二次創作もしていないけれどちょっと行ってみたいな感じでいけるかみたいな話で、まあいける、ちょっと行きづらいところもあるけれど行こうと思えばいけると思うのね。みたいな感じに近づいてきているのかなっていう気はする。

Hさんは上記の発言に続けて、パレードの「攻撃性の低さ」から以下のように肯定的な評価を行っている。

道と、このパレードの人たちにはもちろん内情、何やっているのかっていうのを知っている人もまあもちろん知

らない人も「あなんか楽しいお祭りやっているな」みたいな感じでハイタッチとかできる。ああいう空気がすごいよかったんだと思う。僕シールズとかのパレードだと絶対無理。攻撃性があるっていうか。

これまで本節では、一部の当事者にとってイベントの持つ目的志向性や政治性が薄まることによって参加のハードルが低くなり、それゆえにイベントを肯定的に評価する意見をみてとることができた。

㈤　特定のセクシュアリティが中心になっているイベント

今回のインタビューの結果からは、特定のセクシュアリティを持つ人がイベントにおいて中心になってしまっている可能性や、それが参加者に対してついていけなさを生じさせている可能性がうかがえた。本節ではそうした点について分析を行う。

まずBさんにこのイベントがどういう人に反感を持たれるのかと聞いたところ、「私みたいな曖昧なゾーンにいる人」と「ステレオタイプにフォビックになっている人」という二つを例に挙げている。またその上でパレードというイベントの趣旨とBさん自身のセクシュアリティとの関連性について聞いた際には、パレードへのついていけなさについて以下のように回答している。

私はセクシュアリティ自体が限定し難いセクシュアリティだからやっぱり、なんだろう。このまま生きていけるっちゃあ生きていけるし、まあ生きにくいは生きにくいけど生きていけるといえば生きていけるから、何も別にすごい大声あげてまで主張したいことがないなって、なんかそういう感じがあってね。

これまでの内容からわかるように、Bさんの場合はみずからのセクシュアリティ（パンセクシュアル）がLGBTの枠組みから外れているような「曖昧なゾーン」にいることが「ついていけなさ」を生じさせている。

Bさんと同様の事例として、アセクシュアルであるIさんも、自身のセクシュアリティに関するブースがないことによりイベントへの失望を感じたことについて「今年はアセクシュアルとして参加してもよくわからなかった。逆に悲しくなった。居場所がないというか」と述べている。

また、Iさんは以下のようにLGBTで表される四つのセクシュアリティ内部における差についても言及しつつ、そういった格差を団体の側から是正するよう提言している。

> ゲイとレズビアンはもう慣れていて、やめてってわけでもないけど、慣れているからそんなに主張しなくてもいいけど、BとTとかその後に来る部分にもっと注目してもっといろいろ増やせばいいと思う。例えばパレードのテーマをどこかに絞って、プラカード作ったりメガネにトランスフラッグをプリントしたりして「今年はこういう人たちをサポートします！」みたいな。

こうした「ついていけなさ」はパンセクシュアルであるBさんや、アセクシュアルであるIさんといった、LGBTという言葉には含まれないセクシュアリティを持つ人にとって、LGBTに含まれる四つのセクシュアリティは性的少数者の中でも可視化されやすく、問題が顕在化されやすいがゆえに、そこに属していない、もしくは自分たちの存在が想定されていないと感じることでBさんやIさんに「ついていけなさ」が生じてしまっている。

また引き続き運営主体やイベントに参加する層それ自体に偏りが見られることについても注目していきたい。かつて運営に関わっていたEさんは運営側においてもゲイが中心となり、それ以外のセクシュアリティ（特にLGBTの中

でもバイセクシュアルとトランスジェンダー）が埋もれてしまっていることについてＬＧＢＴをなぞらえた「ＬＧＧＧ」[16]という言葉を使いながら、「ＬＧＧＧは自分のセクシュアリティに関係なくそれはすごい思って、特に二年前はどう考えてもトランスの子達とうまく動けていなかった感じ。一部のトランスの子達は来ていたけれど」と感想を述べている。

ここまでのインタビューからも東京レインボープライドがＬＧＢＴをはじめとした性的少数者というテーマを主眼に掲げつつも、内部的には必ずしも多様な性的少数者が足並みを揃えた上でイベントが進んでいったわけではないことが分かる。ただ、Ｅさんはこうした現状を述べた上で「でも昔よりはＬＧＧＧっぽさはなくなったのかな、イベントに」とＥさんが運営に関わっていた時期よりも状況が改善しつつあると感じている点については言及しておきたい。

㈥　イベントの中で感じる「多様性」や「連帯感」

本節では、イベント参加者へのインタビューの中で見られた参加者が感じる「多様性」や「連帯感」について、「参加者にとって性的少数者全般としての連帯感」や「境界が溶け合う体験」と言う二つの論点に分けて分析する。

１　当事者にとって性的少数者全般としての連帯感

インタビューで明らかになったのは、フェスタ・パレード自体は非当事者のみならず当事者にとっても「性的な多様性が可視化される場」として機能していることである。今回のインタビューでは実際に多様な性的少数者が集まる場所への参加それ自体を良かった点としてあげている例が見られた。

インタビューを行ったＡさんは「参加してよかった点」という質問に対し「都市伝説じゃないけど、非可視化されて、埋没されている。そういった中でたくさんの人が一緒の空間に普通にいるってこと」と回答している。Ａさん自身は性的少数者についての情報は持っており、いわゆるＬＧＢＴと呼ばれる人たちが日本の人口のうち、およそ七％

存在しているとされるデータの存在も知っている。それでも実際に「他の性的少数者」が一堂に会する空間はAさんにとって自己肯定に繋がるものであった。

またBさんも「参加してみて良かったと思った点」について以下のように回答している。

やっぱりなんか年に一回こうやってセクシュアルマイノリティの人たちがあつまるって意味では意味がある、そこに行けば私が何かをやろうと思ったきっかけと同じように同じ悩みを持った人たちと出会いたいと思った時に、ここ行けばセクシュアリティの種類・属性限定せずにみんなが集まるイベントだから、そういう意味では大きい意味があると思う。そこ行けば何かしら誰かと出会えるかもしれない。

この回答を見るにあたり注目したいのが、Bさんが自分のセクシュアリティに関係なく様々な性的少数者との出会いがイベントに参加してよかった点としてあげられていることや、第三節で出てきた「同窓会」のように年に一回集まることに意味を見出している点である。

またCさんは自分自身の感想として「こんなに大勢いるのか、って思った。認識でいうとマイノリティだから、少数派の人間がこんなにいるのか。っていうのが正直な感想」という発言の上で、その際の「大勢」という言葉が特定のセクシュアリティやジェンダーアイデンティティの人をさすのかという点についても「全部」であると答えていることから、CさんもBさん同様にイベントの場が「LGBT」のどれかにとって同じ（Cさんの場合で言えば同じゲイの人々）の存在を感じさせるものとしてではなく、性的少数者全体としての連帯を感じさせるものであることがわかる。

この点についてGさんも似たような感想を述べている。

いや、でも普段単純に言うと二丁目で飲むといつも私同じ店に行っちゃうのね、けどそうするといつも見慣れた人数だったり、結局その場は限られた場だからさ、んで知っている顔がいたり、だけどたまにイベントとかだとそれなりに人数が来て。でもまたそれを超える人数がああいう風に集まる。当事者が。っていうのって、あ、こんなにいるんだやっぱ、みたいな。出てくる人数だけでもこんなにいるんだよねって。いい世の中になったなって。よかったねえみたいな。

Gさんはこの「こんなにいるんだ」という感情がゲイやレズビアン単体ではなく、性的少数者総体としての感情であることを認めた上で、横断的に出会えることとその意義について以下のように回答している。

それこそレインボープライドっていうぐらいレインボーな訳じゃん、セクシュアリティって。だからそういう意味では普段自分のアイデンティティを元に何かしらのコミュニティに入っていたとして、でもそこでは出会えない人たち、出会えない層っていうのはいるっていうのはやっぱりすごいなって思うよね、単純に。だし、こんなにいるんだ、って思えるはず。（中略）日本だとさ、セクシュアルマイノリティっていう意識が強いからじゃん？　マイノリティであるっていう、お仲間じゃないけど、連帯感っていうのは生まれると思うよ。

これらの語りはフェスタ・パレードの場が性的少数者にとっても境界を越えた多様性を感じることのできる場であり、その事が連帯感につながることを表している。一方でこれは「ＬＧＢＴ」といった言葉でまとめられるような性的少数者でも、他の性的少数者と交流を持つ機会が非常に限られていることも示している。そういう面において、このイベントは単一的なセクシュアリティの人にとっての連帯の場ではなく、性的少数者全体にとって総体的な連帯を

感じさせる場として機能していることがこれらの語りから読み取ることができる。

2 「境界が溶け合う空間」としてのパレード

インタビューにおいて、パレードは歩くことで仲間意識を感じ、幾つかの経験を通して自分が渋谷という街に受け入れられているという感情を想起させる体験として位置付けている傾向が見られた。そのなかでもDさんは友人からの誘いで、ストレートではあるが東京レインボープライドのイベントに参加している。Dさんは当初、自分自身が「足を踏み入れることによって自分がいったいどうなるかっていうのを半ば試しに行った」としつつも、「その、どう関わって良いかわからない。場自体に。どう首突っ込んで良いかわからない」状態であったという。さらに先述した通り、フェスタの中で女装バーであるCAMPYの客引きに対して「身がのけぞった」経験をする。

そうした中でDさんはパレードに参加したが、最終的にDさんは非常に開放的な感覚を経験している。インタビューでパレードを歩く中でDさんの考えが変化し、抵抗感が薄れていくまでについて聞いたところ、以下のような回答が得られた。

> 最初すごい見られることを意識していたけれど、なんかだんだん本当にどうでもよくなっていく。（中略）一回気にならなくなった上で、じゃあどういう立場なのっていうのをやっぱり改めて考えるきっかけになると言うか、だから一回その何も気にせず溶けてしまうというかね、その境界が。もうごちゃ混ぜになって、同じ場所にいるんだっていうそれだけの共同性が確保される。

Dさんと似たような体験を述べているものとして、Hさんのエピソードを挙げることができる。HさんはDさん同様、非当事者であり、はじめは自分が非当事者であることとパレードへ参加することとの葛藤があったが、最終的に

はそういった立場性をあえて考えないことにパレードの意義があったのではないかと感じた。

参加したこの自分っていうのが沿道の人からどう見えるのかっていうのはもちろん考えたよ、一回。別にその時に「ああ、あいつもゲイだ」って思われるのは嫌とかじゃなくて、どういう風に僕は見えるんだろうと思って。（中略）自分が作った立場性みたいな、確かに立場性みたいなものはできていった、できていったというか意識していった。意識していったと言うかその結局はだから「どうでもいいんじゃないか」みたいな感じ（中略）あんまり適当な言葉ではないはずなんだけど、「いろんなお前らの気にしていることはどうでもいいだろ」みたいなところはあったような気もする。

上の引用にも表れているようにHさんは自身が非当事者であることからパレードの「見られる」イベントとしての側面から当初は自己表現ができないなどの戸惑いを感じるが、最終的には「どうでもいい」という言葉にも表れるように、そういったものを超えたところに自らの立場性を保持している。

また、ゲイが多すぎる、人が多すぎるといった理由でイベント自体に否定的な印象を持ち、ついていけなさを感じていたIさんも、パレードを歩くなかでその気持ちが変化したことについて以下のように語っている。

今回は（注：自分の性的指向が）オープンの状態で、パレードも楽しみにしていた。が、パレード前日にゆっくり会場を見るために一人できていた。まじ地獄だった。人が多くて、みんななんか叫んでいるし、企業が何かを配っているし。全部ゲイ！って感じだし、五分も経たないうちに橋の上へ逃げた。だけどパレードをはじめて歩いて、他者とつながっている気がした。中に入れば、セクシュアリティ、ジェンダー、目的など関係なく楽しむこ

とができる。共に身体を動かして、心もつながるんだ、と強く感じた。

本節では当事者と非当事者の両方がそれぞれイベントにおいて「ＬＧＢＴ全体としての連帯感」やパレードを通じた「境界が溶け合う」もしくは「どうでもいいんじゃないか」などと感じる体験について見ることで、このイベントが様々な人に包摂される体験を提供しうるイベントであること明らかにした。こうした経験は、前項でも見たような「ＬＧＢＴ」全体に対する帰属意識や連帯感がより広がったものの一つとして考えられるのではないだろうか。

ここまで本章では参加者へのインタビューを通して、参加者がどのような期待を持って参加しているのか、現在のイベントに対してどのような問題を感じているのか、そして参加することがそれぞれにとってどのような経験として捉えられているのかについてインタビューを元に分析を行った。

分析から見えてきたのが参加者にとってイベントはただ楽しむためだけではなく、様々な意義があることがわかった。まず当事者と非当事者とを問わず、このイベントが日本で最大の性的少数者に関するイベントであることを踏まえた上で、その代表性がゆえにイベントに対して非当事者が当事者のことを知るという啓蒙という側面を見出していることが見受けられた。この点についてはこうした側面を過度に内面化しすぎた結果、非当事者の価値観に合わせようとしすぎていないかといった批判も見受けられた。

また当事者にとってイベントは、日常とは違う性と生の多様性を感じられる空間にいることそれ自体が大きな包摂要因となっていることである。これについては一方で、そうした包摂が感じられるのが、すでに何かしらの形でイベントやそこに参加している団体や人々とつながっているという感覚がある人に限られているのではないかという批判もあった。

そのほかには性的少数者の権利獲得運動であったという経緯から、イベントを運動とする見方の一方で、目的志向性のなさや周期性といった点からイベントをお祭りとする立場についても見てきた。これについては次章で運営側にインタビューする上で非常に重要な視点となる。

またイベントの内容や参加者、運営側のメンバーにおいて、性的少数者とひとくくりにしてしまいがちな中でも、特定のセクシュアリティに注目が集まってしまいがちではないかという指摘が見られた。しかしながらその一方でイベントの中で感じる性的少数者それぞれの枠組みを超えた多様性を感じた体験や、非当事者までも包括した人々に対してイベントにおいて包摂感を得られたという声もあり、こうした意見はイベントの意義として非常に大きいものである。

五　運営側の視点

前章では、運営に深く関わっていない参加者が東京レインボープライドのイベントをどのように捉えているのかをインタビューの内容から分析してきた。本章では、こうした人々のイベントに対する考え方を、実際に代表や運営委員長としてイベントの根幹に関わる人物がどのように受け止めるのかを通じて、運営側にとってのイベントのあり方や意図を明らかにしていく。

まず本章におけるインタビュー対象者三名について、簡単に紹介をしておく。

土屋ゆきさんはレズビアン女性であり、二〇一六年度の東京レインボープライドにおいて各イベントを取り仕切るトップである共同運営委員長として関わった。もともと彼女は日本初のパレードである一九九四年のパレードから参加し、「東京レズビアン&ゲイパレード二〇〇一」では実行委員を務めた。東京レインボープライドの運営に携わる

のは二〇一六年度が初めてである。

杉山文野さんは、一九八一年生まれのトランスジェンダーである。フェンシング元女子日本代表であり、早稲田大学大学院にてセクシュアリティを研究した。性同一性障害である自身の体験を織り交ぜた『ダブルハッピネス』（講談社）を出版し、現在も自ら飲食店を経営するかたわら、各地での講演やＮＨＫの番組でＭＣなども務めている。「東京レインボーウィーク」の創始者でもある。その後、東京レインボーウィークと東京レインボープライドの合流に際し、二〇一五年に両団体の代表が共同代表として就任している。

山縣真矢さんは、一九六七年生まれのゲイ男性である。二〇〇二年より東京におけるプライドパレードの運営に携わっている。二〇一一年五月発足の任意団体〈東京レインボープライド〉の創設メンバーであり、二〇一二年九月より任意団体〈東京レインボープライド〉の代表を務める。

ここからはこの三名へのインタビュー内容の分析を行う。先述した通り、今回行ったインタビューは第四章までの草稿を見せた上でそこに対する意見やその上での運営側としての個々人の想いも含んだ意思についてそれぞれに聞いたものである。そのため、本章の節のタイトルには前章の節のタイトルと呼応するものが含まれ、順番もそれを踏まえたものとなっている。

また本文中に引用するインタビュー協力者の語りは、プライバシーの保護や読み易さのために意味を変えない範囲で修正を行っている。また、補足が必要な点については〔　〕で補足を入れている。

㈠　社会に変化を与えるための非当事者へのアプローチ

前章の第二節で考察された「非当事者」のためのイベント、という側面について、三名の見解は以下のようなものであった。

まず杉山さんに二〇二〇年に向けた目標について聞いたところ、「単純に人数とか、関わる人を増やす、露出を増やす、何が大事かって一番突き詰めると、まず知ってもらうこと」と述べた。そのために目指していることは「そう言う存在がいるんだってことを知ってもらうっていう意味では数を増やしていくということかな」つまり、イベントへの参加者を増やすことを目指しており、そういった目標のためには以下のように「非当事者」へのアプローチが重要であると以下のように述べた。

今ＬＧＢＴが五から八％いると言われていて、一番大事なのは八％の当事者に向けて何かをするよりも、九二％の人に知ってもらうということが大事だと思っている。なぜならば別に八％の存在は変わらないからゲイに異性愛者になれと言ってもできないように、別に八％の人の意識を変えたからと言って、変わらない事はある。ただ九二％の人の意識が変われば八％の人の生活も変わってくるんだよね。だから九二％の人たちにより知ってもらうというところに注力した方がいいと思う。

山縣さんも同様に、以下のようにイベントが多様な人にとって開かれたイベントであるのと同時に、非当事者の積極的な参加を進めるべきだと論じている。

まずは自分が参加してどうなのかということが非常に重要だとは思うんだよね。だからそういう中に非当事者も含まれていいし、どんどんそういう人もまざればいいし、誰が当事者で誰が非当事者かわからなくなるくらい混じり合えばいいし、国籍も人種もいろいろなものが混じり合えばいいと思っているのね。

また山縣さんに「イベントが大きくなるにつれ、非当事者が多くなっている」という指摘があるがどう思うかと尋ねた際にも、「どこの国でも大きくなって、動員が増えて業化していく過程で同じようなことが起こってきていて、過去形になっているところもあって、まあ指向性としては東京レインボープライドのパレードをできるだけ大きいものにしたいとは思っていて」とそれに対して否定的ではない見解が示された。

このように共同代表の二人からは、イベントを大きくしていくことを志向していること、その中で非当事者へのアプローチを重要視していることが伺えた。しかし、土屋さんはインタビューの中でこのことに対して以下のような批判的な見解を示している。

トップページにパフォーマーの写真がすごくたくさん出たら、企業スポンサーから二丁目色が強すぎるとかって苦情めいたことを言われたって、営業の方から意見が出ていたじゃない。比率的にあれは多すぎるなって私も思ったんだけれども、私が思った比率は問題じゃなくて、二丁目的なものだから表に出さないっていうのもそれもなんか変な話だよねって。

一方で土屋さん自身も外の目線を意識して行動していたことについて「私もオープニングレセプションの時にスーツ着て出て行ったからまあ外の目線を意識して行ってああいう格好したわけだけれども、まああまり人のこと言えないよなっていうのはちょっと思った」と振り返っている。

㈡　イベントにとって重要な「当事者性」

では、前章の第三節で考察されたような、東京レインボープライドは「当事者」のためのイベントだという意見に

ついて、運営側はどのように考えていたのか。本節ではそういった点について分析を行っていきたい。

まず山縣さんは非当事者へのアプローチが重要であるとインタビューの際に述べつつ、イベントの本質として「当事者性」が重要であることも述べている。この語りには後に考察する「社会運動」や「祝祭」という表現も散見される。

これはＬＧＢＴのプライドパレードなんで、当事者性というものは必ず必要であり、単なる祝祭的なものではなくって、社会運動的な側面を必ず残さないと、そこは本当にコアなアイデンティティだと思うので。例えばこれが共同代表二人がフレンドリーなアライでも困るわけじゃん。

また、山縣さんは続けて以下のように「当事者性」や「コミュニティ」を重視する必要があると述べている。

これからオリンピックに向けてやっていきましょう、できる中で大きくしていきましょうっていう中で、けどまあそれだけではなくて、そうしつつもコミュニティの方をちゃんと向いたりとか見たりとか、そういう人たちの意見をちゃんと聞いたり、そういう人たちもいられる場所を作るとか、いろいろ考えなければいけないところもあると思うけれどね。そういうときに戻るところがやっぱりコミュニティだったり当事者性だったりすると思う。

同様に杉山さんにも、非当事者のためのイベントになりすぎており、当事者のためのイベントではなくなりつつあるという指摘について質問したところ、当事者に対して思いをはせつつも、今の団体におけるマンパワーではその部分に限界を感じていると以下のように述べている。

今回もパレードに参加しようと思ったのに、あんなにマスコミがいたら怖くて歩けませんでしたと。自分たちの行く場所がなくなってしまったという意見もあって、そう言われると心が痛いというか、もちろん何とかケアができないかと思うけれども、でもじゃあそういう意見を気にしすぎても、それ以上に救われている人たちがいるっていう事実があるから。（中略）そういう人（注：マスコミが怖くて歩けない人）たちのことをもちろん忘れていない、一緒にやっているんだっていうつながりを作れるような工夫は細部にまでやりたいけどね。マンパワーがあれば。

杉山さんは「東京レインボープライド共同代表」としてだけではなく、「一人の飲食店経営者」という側面で当事者との関わりや配慮を行なっている。杉山さんは以下のようなインタビューの中で、共同代表としてではなく、様々な当事者に寄り添う活動を続けていることについて、以下のように話している。

僕は必ずでもやっぱりここ（注：イベント会場）にまで来れない、こういうのやってれば寂しく思う当事者がいるっていうことは僕なりにわかってるつもりだし、だからこそ僕は今お店をやったりとかして一人ずつ訪ねてくる人となるべく話すようにしたり、メールが来ればなるべく出来る限り返すようにしたりしているのは、自分なりにバランスをとっていて、やっぱりそういうところだけじゃないよっていう。（中略）個人的にはそういうことをしながら団体として大きくアプローチをしていくっていうのをやることで自分なりのバランスをとっている部分もある。

こうした点については山縣さんも「今はどっちかというとパレードが最初のアクセスで、ボランティアやって運営

やってみたいな感じだよね、今のメンバーはね。僕とか文野君なんかは違うけどね」と語るように運営側が東京レインボープライド以外にもいくつか別の団体や活動に関わっている点について触れている。

ここまで、イベントにおける当事者性について共同代表理事の二名のインタビュー内容を振り返ってきた、二人にとっては「マジョリティのアプローチ」がという意義が前提とされた上で、振り返るべき対象として「当事者性」というものが規定されている点が重要となる。これは次に述べる「お祭り」と「運動」や「活動」のバランスというイベントのあり方についての二名の見解とも大きく関わってくる。

㈢　運動とお祭りのバランス

前章の第四節で述べたように、参加者は東京レインボープライドのイベントに対して「運動」と「お祭り」という異なる二つの側面を見出している。本節では両側面についてインタビューの分析から見ていきたい。

杉山さんに「生活者」としての当事者という側面が強調されることによって政治的な側面が薄れているという参加者の指摘について聞いたところ、やっていることは「活動」であるが、見せ方としては「お祭り」であるというイベント像が提示された。

> 見え方的には年に一度の祭典なんですと、確かにお祭り的な要素もいっぱい増えてきているし、楽しい雰囲気になってきたと、でもその根本の意味が何なのかと言うとやっぱり活動だよね。社会を変えていくための活動であるという所に変わりはないんじゃないかと思っている。

また山縣さんの以下の語りにおいても、「社会運動」という側面と「お祭り」という仕掛けを用いることでより多

くの人を集め、政治的な力を強めたいという意図があることが述べられている。

これはＬＧＢＴのプライドパレードなんで、当事者性というものは必ず必要であり、単なる祝祭的なものではなくって、社会運動的な側面を必ず残さないと、そこは本当にコアなアイデンティティだと思うので。（中略）結局そういう祝祭的なパレードだフェスタだって装置でやっているけれども、全体でＬＧＢＴが社会に認められたりとか、ビジビリティのこととか、それ以外の差別とか、そういうことを最終的には参加することで訴えることになるので、全体としては政治的だと思うのね。お祭りはお祭りなんですよ。ただそれでやって人がたくさん集まれば集まるほど政治的な力も強くなるし、っていうことであれば、ある意味政治的なんですよ。

ここまでイベント運営側の意思やイベント像について「お祭り」なのか「運動」なのかということを軸に見てきた。共同代表理事の二人へのインタビューからはイベントに「お祭り」と「運動」という側面が共存している中で、杉山さんのいう「見せ方」や山縣さんのいう「人を集めるための仕掛け」としてまず「お祭り」という側面があり、それらがイベントの「活動」や「政治運動」というもう一つの側面の力をより強くするという構図が見えてきた。

㈣　「資本主義」や「企業」などとの関係性からみるイベント

本節では「企業」との関わりについて、運営側がどのような展望を持っているのかを考察したい。日本におけるプライドパレードに民間企業が協賛するようになったのは、山縣さんの言葉を借りると「二〇一〇年の東京プライドまであんまり商業的ではない。（中略）ターニングポイントはやっぱり二〇一〇年代になってからだね。（中略）二〇一〇年から二〇一三年の間に変わってきたんじゃないかな」ということになる。

1 「資本主義」や「企業」と不可分であるパレード

そうした流れの中で杉山さんは、「社会を変えるための非当事者へのアプローチ」という目的の上で、性的少数者に対する「派手・おしゃれ」といったポジティブなイメージを普及させるために企業の協力が必要不可欠であると述べている。

みんなそれぞれ生活が大変な中で、みんないろいろ抱えていて、だから自分とは関係ないと思われたら全く見向きもしないじゃない。だけどそこにちょっとでも楽しいとか嬉しいとかいう要素があれば無理なく参加しやすい、何かできることちょっとやろうかな、そういうきっかけ作りが何よりも大事だと思っているから。となるとどうしても派手にやらざる得ない、楽しくやらざるを得ない、企業とかを巻き込んで大きくそういう資本主義社会みたいな流れと大きくやっていかなきゃいけないという現実もある。

また杉山さんは、ただ当事者の利益だけを優先するのではなく、企業と当事者と社会の三方にとって有益なあり方を希求している。

企業とやるからこそできること、企業とはこれからもやっていくけれど、お金がないと何もできないっていうのもあるし、後はさっきも言っていた生活者として認識されるというのはすごい大きいと思うし、そういうので広がっていくと今度「政治的に票になるんだ」と思われるのもそういう人たちがいると認識されれば変わっていくこと。ただただボランティアで助けてあげなきゃいけない人というんじゃなくて、みんな一緒に生活しているんですよって言うのを見せていくのは大事。（中略）お互いwinn-win、企業もwin、社会もwin、当事者もwin、その

win-win-winを目指していて、やっぱりどっかだけがwinになっちゃうと、バランスが崩れて、長い関係性を保てないと思うわけ。

山縣さんは企業との関連性を踏まえた上で、これまでの運営団体とは異なり東京レインボープライドも「プロ」であることを意識しなくてはならないと述べた。そして現在を「過渡期」であるとし、プロとして、ＮＰＯ法人として東京レインボープライドが今後目指していくべき姿について述べている。

安定して続けていくこと、大きなお金が動くようになったことによって、企業に対してもスポンサーに対しても社会的責任とかいろいろなものがあって、ある程度大きくなればなるほど、共同代表にしろ、なにしろ社会的責任は大きくなるわけだよね。だからそういうところ、ちょうどいま過渡期だと思うんだけれども。要はプロの仕事ができるようになるということでもあると思うんだけれども、お金を三〇〇万なり払っている企業に対して、そうなるためにどうするか。でもそのためにはもうちょっとお金が必要で、だからちょうどいまが過渡期だと思っていて。

共同代表理事の二人の意見に共通していることとして、ただ当事者だけに利益をもたらすのではなく、運営団体を企業とも対等に渡り合える存在にすることを目指していることがある。近年のイベントは企業の協賛ありきで行われている一方、それに伴う責任や、それを果たすということによる団体のあり方の変容がうかがえる。

2　アンチ資本主義的な新しい「イベント」の可能性

一方、非常に示唆的であったのが、運営側の三名全員が「お金」や「商業化」といったものとの関係性を踏まえた

上で、それでも「当事者性」や「アンチ資本主義」といったものを重視した新たなパレードができる可能性に期待を寄せている点である。

土屋さんに東京レインボープライドのイベントが「当事者のため」という側面を担えるかどうかについて「資本流入」という言葉を使いつつ以下のような予想を提示している。

私がちょっと考えているのは、多分あと十年もしないうちにアンチ資本主義的なミニパレードは多分発生するだろうなと思っていて。今のＴＲＰのあり方に反対する人が。まぁＴＲＰが全てを統括できるわけじゃないし、してはいけないと思うので。私は割とそういう動きは歓迎ぎみ、東京でアンチテーゼとして小さなパレードが手作りで行われる。いわゆるスポンサーとかなしの九〇年代のパレード的なものをやりたい立ち返りたいみたいな活動が出てくるかなって思っていて。多分もう資本流入っていうのはどうにも抑えきれない。

杉山さんも同様に「企業」や「コミュニティ」という言葉を使いつつ、別のパレードが生まれる可能性について以下のように語っている。

今ＬＧＢＴが一丸となってみたいなことでもないし、だっていろんな人いるんだからさ、だからそういう意味ではパレードとかが良い意味で分裂するのはいいと思っている。例えば「自分たちは企業とはやりたくない、そんなのはもういいからほんとに小さいコミュニティだけで、小さくてもいいからコミュニティだけでやりたい」って言う人たちが出てきたときにそれを否定するつもりはなくて。

山縣さんに対してイベントが大きくなることにより当事者性が低くなるのではないかという懸念について聞いたところ、以下のようにイベントとしての東京レインボープライドが必ずしも当事者のためだけのものではなく、むしろ純粋に当事者のためのものとしてのイベントについては、他のイベントがそういった役割を担うことが可能なのではないかという見方が提示された。

まあ指向性としては東京レインボープライドのパレードをできるだけ大きいものにしたいとは思っていて。ひとつのイベントとしてそれこそ東京の観光資源になるくらいのものになってほしいというのは一方である。そうするとそういう風な意見も出てくると思う。でもそういうのって他の場でも作れるような気がするんだよね。

ここまで本節では企業や資本主義という言葉をキーワードとして、今後のイベントの目指す方向性や志向性についてみてきた。そうした中から見えてきたのが、当事者だけに利益をもたらすのではなく、運営団体を企業とも対等に渡り合える「プロ」としてのあり方を運営側が目指していることであった。またイベントが企業との関係を強めていく中で、「当事者性」や「コミュニティ」と言った言葉に代表されるような「当事者のためのパレード」が現在のイベントとは別に発生するのではないかという見方が提示された。

㈤ 「選択しない」という選択

本節では共同代表理事の二人が、運営側がイベントを行うにあたり「選択しない」という点に重きを置いていることに注目したい。杉山さんは自らのリーダー論や自分自身の性格を引き合いに出しつつ、イベント自体に偏りがあってはいけないという基本方針があり、それが多様な人を受け入れるプラットフォームとしての役割を果たすと規定し

ている中で、共同代表理事として自分が果たす役割やその中での取捨選択について以下のように論じている。

「全員で百二十点目指しても、一歩も進めないんだったら、全員六〇点でもいいから一歩前に進まない？」って言う、そういう提案をするっていうのが大事なんじゃないかなと思っていて、そういう意味でいうと僕は個人としてはあまり強いこだわりとか強いビジョンとかが逆にないぶん、今代表をできているんじゃないかなっていうのが自分なりの自分の分析。（中略）「好きな人も嫌いな人もパレード歩きたい人も歩きたくない人も年に一回くらいは一緒にやらない？」っていうそのプラットフォームを作るっていうのが一番大事なことなんじゃないかなというふうに僕は思っていて。

また杉山さんは「多様な人々の多様な意見」を受け止めるためのプラットフォームとして、東京レインボープライドが特定の指向性を持っていないとした上で、こうした方針の今後について「ある程度これからどうしていくかみたいな所だとまた変わってくるかもしれないけれど、ある程度はまだそこのフェーズでいいんじゃないかなと思っていて。」と述べている。

この点については山縣さんも同様に、現時点では団体として指向性を持つことを意識していないと述べている。

今後東京レインボープライドがＮＰＯ法人としていろいろ他の事業をやるとしても、パレードは「場作り」なので、もちろん東京レインボープライドとしてパレードにおいてもうちょっと強いスローガンだとかメッセージだとか、あってしかるべきだと思うけれども、基本的にはより多くの人が参加できるような場を作るイベントなので。（中略）いろんな別れる考えがあったとしても、その両方の人が参加できるのがパレードのいいところだと

思うし、セクシュアリティも横断で、いろんな人が参加できる。それでいて楽しかったり、エンパワーされたり、そういう風な場かな。

こうした点について、土屋さんの意見は共同代表理事よりも参加者に近い目線でのインタビュー結果が得られた。まず土屋さんはこのイベントのもつ「多様な人が集う場」という側面について、以下のように肯定的な意見をのべている。

パレードっていう場ではみんなすごく平で横一線みんな参加者横一線ですよって言うのが基本設計なので、ドラァグクィーンも、地味でどうしようもない活動系のレズビアンも、パンツ一丁の露出ゲイも、皆等しく等価ですよって言う。私はそれがすごく好きだなって思っていて。

その上で土屋さんも「プラットフォーム」という言葉をつかいつつ、偏りがあまりない形でイベントが実施されていることを評価している。

参加者のプラットフォームの提供の場であり、そのプラットフォームが歩く参加者だけでなく、フロートの参加とかブースの参加とかウィークにおいてもある程度の変更みたいなものあるかもしれないけれども、どうしても参加するっていうことがカムアウトみたいなものも伴ってしまうので、そういうところでの偏りっていうのはどうしても運営の性質上あってしまうんだけれども、その制約の中でもあまり色のない枠を提供できている提供するっていうことに私はすごく価値があると思っていて。

しかし、土屋さんは運営を行うにあたり、現在の団体が共同代表理事にもコントロールできない「生物」であるとも語っている。

全体的にパレードとかって運営委員、一番トップの山縣さんとか文野くんとかクラスの人でもこうしたいって思ってももうどうにもできない大きい生物みたいになっちゃって、もう多分コントロールきかないと思うんだよね。でそういう中で運営が何できるかっていったら、もう致命的な失点をいかに避けるかっていう考え方になっていると思うし、私が今年打ち出した共催イベントをやってみましょうっていうような働きかけみたいのが多分いろいろ限界なのかなって思っていて。

このように、三人のインタビューからは東京レインボープライドが様々な面において「偏り」のない形で運営し、将来的に変わる可能性を見据えつつも、「選択」をなるべく行わない形でのあり方を現時点では目指していることが見て取れた。

六　イベント・団体としての東京レインボープライドの展望

本章ではこれまでの分析結果を踏まえ、まず現在のイベントがどのような特性を持っているのかについて振り返った上で、その特性の結果として参加者が感じている問題について明らかにしていく。またそうした問題やそれによる「ついていけなさ」を軽減させるためにどのような手段を取り得るのかについても合わせて考えていきたい。またその後、団体としての東京レインボープライドが現在どのような意図をもってイベントを運営しているのかを振り返っ

た上で、その意図や目的にたいして現在のイベントとしての東京レインボープライドが持つ限界について見ていく。その上で最後に団体としての東京レインボープライドがどのような展望や可能性を持っているのかについて分析をおこなう。

㈠　イベントの性質とそこから生じる意義

まず前章で見たとおり、東京レインボープライドはイベントの規模が大きくなっていくに従い、企業との連携を強めていった。そうした中で東京レインボープライドの変化として見られたのが「運動」という側面の弱まりとそれに伴う新たな層の参加者の増大であった。

すでに紹介したように、Fさんは企業が増えたことにより以下のように参加しやすくなったと述べている。

> ＬＧＢＴっていう言葉が非常に市場価値的な言葉、ネオリベ的な言葉に巻き込まれたことによって、多分それによって、逆に多様性みたいなものが、あってもいいやみたいなことになっている。（中略）操作的概念としてのＬＧＢＴっていうものが出てきた感じ？　操作的概念としてのＬＧＢＴってものがある意味非常に運動色とか当事者色をうすめたことによって、逆に今まで乗ってこられなかった周縁化されていた当事者が乗れるようになったって感じ。

前章で見てきたように、こうした多様な人々の参加はプラットフォームとしてのイベントを提供したいと考えている運営側にとっても確かに重要であるといえる。これは杉山さんの「特に多様性を大事にしようなんてイベントでやっぱり偏っちゃいけないと思っているから、だから誰もが参加できるっていうのをまずすごく大事にしている」とい

う語りからも読み取ることができる。

しかしながら、こうしたイベントの性質は参加者にとってついて行けなさを生じさせてしまっている側面もある。次節ではそういった点についてこれまでの論文の内容を引用しつつ書いていきたい。

㈡　イベントの性質により参加者が感じる問題とその解決策

前節ではイベントのあり方が変わることによって、非当事者だけではなく当事者も含めてより広い層の人々が参加できるようになったことについて見てきた。しかしながら第四章で考察したように、現在のイベントに対して参加者は様々な課題を感じており、それらは当事者・非当事者問わずついていけなさを生じさせてしまうものであった。

こうした課題の中でも特に注目したいのが、当事者・非当事者両方の参加者が「自分のような存在は想定されていないのではないか」というものであった。この問題はさらに「イベントが当事者の中でも特定の人々のための場所になってしまっていないか」という問題にも繋がるものである。これについてはCさんの「あの場所にいた人たちの多くの人は個人の印象だけど、友達に会いに行っている感じ。（中略）あの場所に行ったところで『同窓会』みたいなもんでさ。何も新しいものも始まらないし生み出さない」という語りや、Eさんの「当事者じゃない人も参加しているんだよっていうのをまあわかってもらえるといいのかなって思った」といった声を、その具体例として挙げることができる。

こうした問題は、運営側が意識していた「多様性」の中に必ずしも「接点がない／何も知らない／交流する相手を持たない参加者」という像が想定されていないことを浮き彫りにするという意味で重要である。そうした指摘を受け、運営側は、「より多様な参加者像」にとって居場所たり得るプラットフォームを提供する、具体的に言えば「より多様なセクシュアリティを扱うものや、非当事者が基礎的なレベルから情報を得ることができる団体の招致やコンテン

ツの提供」ということが必要ではないだろうか。これについてはアセクシュアルであるIさんがイベントにたいして「自分と関係がない」とした点や「今年はアセクシュアルとして参加してもよくわからなかった。逆に悲しくなった。居場所がないというか」といった意見が元になっている。確かに第五章で見てきたように運営側は必ずしも志向性を持つことをよしとしないが、イベントとのつながりをもたない初参加者や、興味はあるものの情報をあまり持っていない非当事者にたいしても疎外感を感じさせないように配慮する必要がある。そのためには多様な人々に適合するような団体を自主的に呼んだり、当日の会場運用を工夫したりすることでこうした課題に対応することができる。

本節ではイベントの特性を踏まえた上で、そこで生じている課題とそれに対する解決策についてこれまでの内容を元に考察を行った。しかしながら多様なアクターに対して、それぞれの意図や思いを表明するプラットフォームとしてイベントを提供している以上、団体としての東京レインボープライドがイベントにできることは限られている。

次節ではイベントへの運営側の展望とイベントの特性とを照らし合わせることで、運営側がイベントにおいて達成したいと考えている目的が現在の団体とイベントとの関係性では達成することが難しいのではないかという点について指摘していく。

㈢　運営側の展望とイベントの性質により生じる限界

前章でも見てきた通り、運営側はイベントを通じた社会全体へのアプローチをイベントの大きな目的の一つとして運営を行っている。このことは前章にて運営側の三人全員が、現在のイベントがこのままの形で成長していった場合に、イベントとしての東京レインボープライドとはまた別に「アンチ資本主義」や「当事者目線」、「コミュニティだけ」なイベントが生じる可能性について言及していることからも伺える。

こうした運営側の未来像は、団体としての東京レインボープライドは「社会を変えるための非当事者へのアプロー

チ」のため、今後のイベントについては参加人数をより増やしたり、イベントのクオリティにおいてより良いものを提供するために前章でも触れたような「プロ」としての側面をより強くしたりすることを希求していることがわかる。

しかしながら、前章で土屋さんが現在のイベントについて「全体的にパレードとかって運営委員、一番トップの山縣さんとか文野くんとかクラスの人でもこうしたいって思ってももうどうにもできない大きい生物みたいになっちゃって、もう多分コントロールきかないと思うんだよね」と規定しているように、現在のイベントはすでに大きくなりすぎた結果、コントロールが非常に困難になってしまっている。

こうした中でイベントでの経験やそこで得たつながりを活かして、社会に影響を与えるために団体としての東京レインボープライドはどのような可能性や展望があるのであろうか、次節ではそういった点について見ていく。

㈣　団体としての東京レインボープライドの展望

本節では団体としての東京レインボープライドは今後どういった役割を担うことができるのかについて、現在のイベントに限らず、団体としての東京レインボープライドが社会を変えるためにできることについて様々な側面から見ていきたい。結論から述べると本論文で団体としての東京レインボープライドがその目的を達成するための今後の展望として提唱したいのが「多様なアクターの協働を促進する存在」としての東京レインボープライドである。これはインタビューから得られた示唆と、後述する最近東京レインボープライドが始めた「コミュニティスペース」のあり方から提唱されるものである。

まず、イベントは先ほど引用した土屋さんの語りの通り、大きくなりすぎてすでに運営側の手に負えない存在になってしまっているが、その上で東京レインボープライドが果たせる役割を考えるヒントがそのインタビューにある。それは「私が今年打ち出した共催イベントをやってみましょうっていうような働きかけみたいのが多分いろいろ限界

なのかなって思っていて」というものである。つまり、東京レインボープライドが大きくなりすぎた中でできることとして土屋さんから提示されているのが、団体自体が動くわけではなく、外部に「働きかけ」を行うというものである。

これについては山縣さんの「年に一回くらいはそういう枠を取っ払っていろいろな団体とか一緒になって、そこでグループとグループ、個人と個人が繋がることでまた新たな面白いことができたりとかもするだろうし」といった意見や、インタビューの中で散見された「プラットフォーム」という言葉からも、こうした「働きかけ」の可能性を見出すことができる。こうした団体のあり方は参加者へのインタビューで指摘された「非当事者を啓蒙するためのイベント」という要望にも、運営側の目指す「社会に働きかけていく」という理想にも合致するものである。

これらは「パレード」や「フェスタ」や「ウィーク」として行われるのはもちろん、こうしたイベントの実績を踏まえた上で、今後団体名として「東京レインボープライド」という名前を用いつつも、これまでのイベントとしての「東京レインボープライド」とは異なる新たなイベントを行うことも視野に入れたものである。東京レインボープライドが必ずしも現在行っているイベントのためだけの団体ではないということについては、山縣さんの「ただ単にパレードを大きくしていくんじゃなくて、将来的には東京レインボープライドがコミュニティセンターみたいなものを作るかもしれないし、個人的には僕はライブラリみたいなものを考えていて」という発言からも読み取れる。

これまで「パレード」や「フェスタ」や「ウィーク」などでプラットフォームとして「企業」と「行政」と「NPO」という多様なアクターと協働し、日本において最大の性的少数者に関するイベントを運営する団体としてリードしてきた東京レインボープライドだからこそ、今後の展望として「多様なアクターの協働を促進する存在」というあり方がみえてくる。

前段落の三つのアクターのなかでも企業の存在は非常に重要である。先述したように企業がこのようなイベントに

協賛するようになったのは二〇一〇年代と比較的最近であるが、性的少数者に関する支援や運動の中でも東京レインボープライドは多くの企業から協賛をうけている。だからこそこれまでもあったような「行政」と「ＮＰＯ」だけではできない新たな協働を巻き起こすことができるのではないだろうか。

すでにこうした働きかけについては幾つかの例で動き始めている。例えば広報協力をすることで様々な団体のイベントにより多くの集客を見込む東京レインボーウィークもそこに当てはまるが、特筆すべきは二〇一六年十一月から始まった、東京レインボープライドが渋谷区から委託される形で始まった「渋谷にかける虹」という名前の「コミュニティスペース運営事業」である。

これは渋谷区の男女共同参画センターにて月に一度情報を提供したり交流したりするイベントを行うというもので「コミュニティスペース運営事業」というよりは「イベント運営事業」といった方がより正確であるが、この事業の一環である二〇一六年十二月のイベントにおいて、東京レインボープライドとはまた別のＮＰＯである「ぷれいす東京」によるミニプレゼンテーションが行われた[17]。このイベントが重要なのは「行政」である渋谷区がＮＰＯである東京レインボープライドに委託をし、東京レインボープライドがハブとなってまた別のＮＰＯであるぷれいす東京の講演の場を提供したことである。

特定の自治体が特定のＮＰＯに何かしらの事業を委託することはあるが、自治体とＮＰＯとの間にハブとして東京レインボープライドが存在するという点において、こうした動きは「多様なアクターの協働を促進する存在」としての東京レインボープライドのあり方の可能性を裏付けるものではないだろうか。

こうした協働を新たなコミュニティスペースの運営から促す際には、その内容や意義が問われると言える。しかしながら、これまでの知見を生かし、団体にとってもより志向性を規定しやすい小さなイベントとしてのコミュニティスペース運営を行うことで、これまでのイベントではついていけなさを感じてしまっていた人々に対しても、より効

果的なアプローチを行うことができると言える。

こうした展望を踏まえた上で、東京レインボープライドが果たすべき役割とは、より「多様なアクターの協働を促進する存在」として様々な企業や団体を巻きこみ、イベントをより大きくし、同時にプラットフォームとしての役割を果たすために「多様な人々」にとって参加しやすいイベントを開催し続けていくというものではないだろうか。これは必ずしも現在の東京レインボープライドだけではカバーしきれない部分もあるが、こうした点においては、様々な団体に働きかけを行っていくことで解消することができるのではないだろうか。

おわりに

すでに述べたように、本論文の目的は性的少数者に関するイベントとしては日本で最も多い動員数を記録している「東京レインボープライド」というイベントを対象とし、その一参加者であると同時に運営にも三年以上関わってきた立場から、その意義や問題点、展望について考察することであった。

こうした研究から見えてきたのが、以下のようなイベントとしての東京レインボープライドと団体としての東京レインボープライド両者の課題や意義、その展望である。まずイベントの課題は当事者・非当事者関係なく「自分のような存在は想定されていないのではないか」と感じることに端を発するものであった。こうした課題に対し、著者はイベントの限界について考慮した上で「より多様なセクシュアリティを扱うものや、非当事者が基礎的なレベルから情報を得ることができる団体の招致やコンテンツの提供」という解決手段を提案したい。

また団体は「社会を変えるための非当事者へのアプローチ」を目指している。しかしイベントとしての東京レインボープライドはその規模が大きくなりすぎたがゆえに、運営側にも制御不能な状態に陥っているとの指摘がインタビ

ューから見られた。さらに現在のイベントにおいて運営側が出展者や参加者に対して「プラットフォーム」を提供することを重視している。その上でこれまでのイベントで関わってきた多様なアクターとの関係性や、すでに実施が始まっているコミュニティスペース事業などをもとに、団体としての東京レインボープライドがその目的を達成するための展望として「多様なアクターの協働を促進する存在」というあり方を提唱する。

本論文において残された課題として、今回は様々なインタビュイーの意見を取り込むことを重視した結果、インタビューデータを元にした分析や、その際の分類の仕方などが必ずしも現状の課題をわかりやすく網羅的に扱ったものではないと言う点が挙げられる。またそうした課題から、本論文では学問的知見を分析に落とし込むことが十分にできなかった。これは本論文の最も大きな課題である。

（1）日本でも近年、すべての人の性と生のあり方を包摂して表現する言葉として、「セクシュアルオリエンテーション」と「ジェンダーアイデンティティ」の頭文字をとった「ＳＯＧＩ（ソギ・ソジ）」という概念が使われ始めている。

（2）セクシュアリティ・ジェンダーによる排除の例について触れた記事として「多様な性深まらぬ理解」（『朝日新聞』二〇一五・四・三〇朝刊、東京都版、三九面）で取り上げられている男女どちらの性自認もない人による「複雑な気持ち」の吐露を挙げることができる。

（3）本論文の問題意識の一つである「ＬＧＢＴ」という言葉の持つ包摂性と排他性について非常にうまく記しているものとして、タレント・文筆家である牧村朝子による以下のエッセイがある。牧村朝子、二〇一五、「拝啓ＬＧＢＴという概念さんへ」『現代思想』四三（一六）、七二―七四。

（4）「府中青年の家事件」とはアカーが都立府中青年の家で合宿を行った際に受けた嫌がらせに端を発する、日本における同性愛者に対する差別が初めて法廷の場で問われた事件である。

（5）二〇一六年の東京レインボープライドでは代々木公園とその周辺で二日間行われるイベントの初日を「フェスタ」、二日目を「パレード」と表記しているが、本論文では便宜的に代々木公園イベント広場・野外ステージで行われている

イベントを「フェスタ」、道路を貸し切って行う行進を「パレード」と表現する。

(6) 二〇一四年度には夏木マリ、二〇一五年度には清水ミチコとＩＭＡＲＵ、二〇一六年度にはＣＨＡＲＡが参加している。

(7) 一部ではフロートなしで歩く団体もあり、それらはマーチングと呼ばれているが、本論文では基本的に両者を合わせて「フロート」と表記する。

(8) 各年度により他イベントの開催場所との兼ね合いで、例年ゴールデンウィーク期間に行われているがゴールデンウィークのいつに行われているかは年により異なっている。

(9) アライとは性的少数者非当事者ながら性的少数者への支援を表明、実行している人々のことであり、支援者＝allianceが由来となっている。

(10) 男性・女性の二分法に基づいた性のあり方に適合しない人も含めたあらゆるひとに恋愛感情や性的な願望を抱く人のこと。

(11) 好きになる性別が定まっておらず、相手によって変わる性のあり方のこと。

(12) 二〇一二年以前にも一度参加経歴あり、正確な年次は不明。

(13) 他者に対して恋愛感情や性的欲求を抱かない人のこと。

(14) 上半身裸や水着に近い服等を着た、肌を多く露出した人々のこと。

(15) Ｃさんはトランスジェンダーの人に与える影響を鑑みた上で、「女装」ではなく「仮装」と表現している。

(16) イベントなどにおいてゲイが非常に目立っており、次いでレズビアンの存在が見えているものの、バイセクシュアルやトランスジェンダーの存在が見えなくなってしまっているという状態を表したＥさんによる造語

(17) 「＃渋谷にかける虹」十二月十七日（土）イベントの詳細を発表！　TOKYO RAINBOW PRIDE」http://tokyorainbowpride.com/news/notice/1683（閲覧日：二〇一六年一二月一一日）。

参考文献・資料

古川誠、一九九七「近代日本の同性愛認識の変遷――男色文化から「変態性欲」への転落まで」『季刊女子教育もんだい』七〇、三一―三六。

堀あきこ、二〇一〇「ヤオイはゲイ差別か？」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕六――セクシュアリティの多様性と排除』明石書店、二一―五四。
堀川修平、二〇一六「日本のセクシュアル・マイノリティ運動の変遷から見る運動の今日的課題――デモとしての「パレード」から祭りとしての「パレードへ」」『女性学』二三、六四―八五。
飯野由里子、二〇〇六「『エイズ予防法』案に反対したレズビアンたち」桜井淳編『戦後世相の経験史』せりか書房、二〇〇―二一九。
――、二〇一〇『レズビアンである〈わたしたち〉のストーリー』生活書院。
河口和也、二〇〇三『クィア・スタディーズ』岩波書店。
風間孝、一九九六「運動と調査の間――同性愛者運動への参与観察から」佐藤健二編『二一世紀の年社会学』勁草書房、六五―一〇二。
――、一九九七『ゲイ・スタディーズ』青土社。
――、二〇〇二「カミングアウトのポリティクス」『社会学評論』五三㈢、三四八―三六四。
――、二〇〇三「親密圏の政治学」竹村和子編『〝ポスト〟フェミニズム』作品社、一五七―一七六。
――・河口和也、二〇一〇『同性愛と異性愛』岩波書店。
――・飯田貴子、二〇一〇「男同士の結びつきと同性愛タブー」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕六――セクシュアリティの多様性と排除』明石書店、九三―一二四。
前川直哉、二〇一一『男の絆――明治の学生からボーイズ・ラブまで』筑摩書房。
牧村朝子、二〇一五「拝啓ＬＧＢＴという概念さんへ」『現代思想』、四三（一六）、七二―七四。
南定四郎、一九九六「日本のレズビアン／ゲイムーブメントの歴史と戦略」クィア・スタディーズ編集委員会編『クィア・スタディーズ'96』七つ森書館、一七二―一八一。
三橋順子、二〇一五「日本トランスジェンダー小史」『現代思想』四三（一六）、二一八―二三〇。
溝口彰子、二〇〇〇「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン――最近のやおいテキストを分析する」『クィア・ジャパン』二、一九三―二一一。
森山至貴、二〇一二『ゲイコミュニティの社会学』勁草書房。

長野慎一、二〇一四「家族と性的少数者」渡辺秀樹・竹ノ下弘久編『越境する家族社会学』学文社、一七二―一八九。
小倉康嗣、二〇〇一「ゲイの老後は悲惨か?――再帰的近代としての高齢化社会とゲイのエイジング」『クィア・ジャパン』五、九五―一〇八。
――、二〇一四「家族のそのさき、絆のそのさき――「ゲイのエイジング」というフィールドが持つ意味」渡辺秀樹・竹ノ下弘久編『越境する家族社会学』学文社、一九〇―二一一。
大畑裕嗣・道場親信・樋口直人編、二〇〇四『社会運動の社会学』有斐閣。
杉浦郁子、二〇一〇「レズビアンの欲望／主体／排除を無視する社会について」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕六――セクシュアリティの多様性と排除』明石書店、五五―九二。
砂川秀樹、二〇〇三「レズビアン&ゲイ・パレードが与える希望」『神奈川大学評論』四五、一〇〇―一〇六。
氏家幹人、一九九五『武士道とエロス』講談社。
渡辺恒夫、一九八六『脱男性の時代――アンドロジナスを目指す文明学』勁草書房。
好井裕明、一九九一「排除と差別のエスノメソドロジー――「いま―ここ」の権力作用を解読する」新曜社。
――、二〇一五「「柔らかく、そしてタフな」言葉や理論の創造へ」好井裕明編『差別と排除の〔いま〕一――現代の差別と排除をみる視点』明石書店、一三七―一七四。

巴　健太郎（ともえ　けんたろう）
所　　属　慶應義塾大学大学院法学研究科前期博士課程二年
専攻領域　社会学